

鳴上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・14



1990

高槻市教育委員会

## はしがき

嶋上郡衙跡の発掘調査を本市が直営事業として、今年で早や14年目を迎えます。本市では、昭和40年代の後半から人口の増加が急激におこり、大規模な宅地開発によって田園都市から一転して36万の人口を擁する衛星都市になってしまいました。市内各地ではこうした開発に伴って年間約50件におよぶ発掘調査が実施され、各遺跡から得た貴重で数多くの成果をもとに、嶋上郡衙の成立発展の究明が進められてきました。特に最近おこなわれた重要な調査としては、嶋上郡衙跡の対岸に位置する弥生時代から中世の芥川遺跡があり、弥生時代の集落を巡る環濠と住居群が大規模に調査され、遺跡の全貌が明らかにされようとしていますし、西の土室地区でも、古墳時代から奈良時代にかけての新池遺跡が調査され、丘陵上に営まれた集落の全容が解明されています。

今年度も、嶋上郡衙跡周辺部で個人住宅に伴う調査が多数実施され、多くの成果をあげることができました。郡衙東側の調査地では、古墳時代の遺物を多く含む旧芥川の厚い堆積層が確認され、郡衙成立前の地形を復元する手掛かりが得られるようになりました。また、郡家今城遺跡の調査では、集落の北側を東西に走る山陽道が検出され、以前から嶋上郡衙跡の南側で知られていた石敷きの山陽道と計画的には直線で結ばれていたことが明らかになりました。郡家今城遺跡と嶋上郡衙跡との関係については、山陽道を挟んで近接する位置にあり、奈良時代の豊富な出土遺物とともに計画的に配置された掘立柱建物群などによって、早くから密接な関係にあったことが指摘されていましたが、今回の調査でも官位を表す銅製帶金具・石製帶金具が相ついで発見され、郡司クラスの居住地があったことが判明しました。

一方、市内東端に位置する梶原・神内地区は、平城遷都とともに設けられた都亭駅といわれる「大原駅」の推定地の一つにあげられています。今回、駅跡と関連すると考えられている「神奈備の森」推定地を初めて調査しましたが、山塊にあまり近すぎていたためか、良好な成果を得ることができませんでした。

ここに今年度の発掘調査の結果をまとめ、多くの方々のご教示をあおぐとともに、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝いたします。

平成2年3月31日

高槻市教育委員会

社会教育課長 烏越仁道

## 例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が平成元年度国庫補助事業（総額9,000,000円）として計画、実施した高槻市所在の史跡・堺上郡街跡周辺部および郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成元年4月11日に着手、平成2年3月31日に終了した。
3. 調査は、高槻市立埋蔵文化財調査センターがおこなった。組織及び調査担当者は以下のとおりである。

所　　長	富成哲也
次　　長	大船孝弘
事務吏員	桑田喜代子
技術吏員	橋本久和・森田克行・鐘ヶ江一朗 宮崎康雄・高橋公一
文化財専門員	中村公一・北原治・武村雅一

4. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、分担は文末に記した。出土遺物の写真撮影は中村公一、同実測・製図は各担当者がおこなった。遺物整理については以下の各氏の援助をうけた。厚く感謝する。

清田悦子・楠瀬久恵・佐藤喜久子・白銀良子・辻美紀・古木寿子

5. 調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。
- 久保田政雄、太田八郎、山田敏郎、玉置幸一、中村幸吉、三原国夫、住谷茂樹、吉田弘、林ミサヲ、吉田淳子、加藤伸弘、辻田俊寛、好田隼人、松井健、出原昭夫、河野敏昭、太祐一郎、高橋福男、前川英二、橋本美佐子、山口孝治、河合英雄、三宅国雄、古藤茂治、吉田明、西康政、杉本忠雄、寺内康泰、北村富雄、須藤英司、麻生勇治、長谷川保、梶村昌史、上杉実、岩本正一

## 目 次

I 島上郡衙跡	1
II 水室塚古墳	17
III 宮田遺跡	18
IV 富田遺跡	19
V 郡家今城遺跡	21
VI 郡家本町遺跡	36
VII 大歳司遺跡	37
VIII 芥川遺跡	39
IX 高櫻城跡	40
X 安満遺跡	42
XI 天川遺跡	43
XII 榛原寺跡	44
XIII 神内遺跡	45
XIV まとめ	48

No	遺跡名(地区)	調査地	面積(m <sup>2</sup> )	申請者
1	鳴上郡街跡(12-N)	郡家町534-2	495	久保田政雄
2	" (17-C·G)	清福寺町806-1~4	870	太田八郎
3	" (38-D)	清福寺町920-3	103.03	山田敏郎
4	" (38-N)	清福寺町915-3	164.7	玉置幸一
5	" (43-F)	郡家新町395-22	86.72	中村幸吉
6	" (43-G·H)	郡家新町392・393	85.14	高槻市
7	" (43-N)	郡家新町395-42	71.2	三原国夫
8	" (45-A·E)	郡家新町341他	155.3	高槻市
9	" (48-I)	川西町一丁目953-15	49.34	住谷茂樹
10	" (48-P)	川西町一丁目966	188	吉田弘
11	" (55-J·K·L)	郡家新町250他	161	高槻市
12	" (73-P)	郡家新町149-1	256.63	林ミサヲ
13	水室塚古墳	水室町二丁目571-10	156.15	吉田淳子
14	宮田遺跡	宮田町三丁目94-2	912	加藤伸弘
15	富田遺跡(89-1)	富田町四丁目2543-2	150.48	辻田俊寛
16	" (89-2)	富田町六丁目2553	363.835	好田隼人
17	" (89-3)	富田町六丁目3674-1	126.44	松井健
18	郡家今城遺跡(89-1)	水室町一丁目796-16・17	87	出原昭夫
19	" (89-2)	水室町一丁目773	991	河野敏昭
20	" (89-3)	水室町一丁目781-31	46.6	太祐一郎
21	" (89-4)	水室町一丁目781-6・782-8	123.93	高橋福男
22	" (89-5)	水室町一丁目786-29・782-7	109.01	前川英二
23	郡家本町遺跡	郡家本町1565-4	335.99	橋本美佐子
24	大藏司遺跡(89-1)	大藏司三丁目208	261.96	山口孝治
25	" (89-2)	大藏司三丁目205-14	45.84	河合英雄
26	" (89-3)	大藏司三丁目205-10	100.24	三宅国雄
27	" (89-4)	大藏司三丁目123-1	576.63	古藤茂治
28	芥川遺跡	殿町70-1	77.39	吉田明
29	高櫻城跡(89-1)	野見町1251-18	269.13	西康政
30	" (89-2)	城内町1002-13	86.36	杉本忠雄
31	" (89-3)	城内町1045-7・8	268.17	寺内康泰
32	" (89-4)	城内町1015-11	115.7	北村富雄・淳子
33	安満遺跡(89-1)	八丁畷町154-21	72.77	須藤英司
34	" (89-2)	八丁畷町154-20	68.37	麻生勇治
35	天川遺跡	辻子一丁目287-2	661	長谷川保
36	梶原寺跡(89-1)	梶原一丁目1367-1	166.89	梶村昌史
37	" (89-2)	梶原一丁目392-5	112.09	上杉実
38	神内遺跡	上牧北駅前町101-3他	574	岩本正一

平成元年度 鳴上郡街跡他関連遺跡調査地一覧

# I. 島上郡衙跡

## 1. 島上郡衙跡（12-N地区）の調査

島上郡衙跡の西辺部、高槻市郡家本町534-2番地において宅地造成が計画されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。調査地は北から南へのびる丘陵が平野へと変換した場所に近く、緩やかな傾斜をもつ水田である。周辺は過去に実施した調査から遺構・遺物の希薄な地域であることが判明している。今回の調査でも同様のことが予測されたため掘削には重機を使用し、その後人力で地山面まで掘り下げて遺構・遺物の検出に努めた。調査面積は約500m<sup>2</sup>、調査地の小字は位前である。

### 遺構・遺物（図版第2・3、図2・3）

基本的な層序は耕作土・床土(0.4m)、暗褐色土〔遺物包含層〕(0.2m)、黄褐色砂質土〔地山〕である。地山面の標高は約19mを測り、北から南へ緩やかに傾斜している。

検出した遺構は自然流路2条である。

自然流路1は調査区北側で検出した。幅6～7m、深さ約0.3mで埋土は暗灰色砂と黒色粘土の互層となっている。

自然流路2は調査区南側、自然流路1より派生したような状態で検出した。幅約2m、深さ0.2mを測る。地形から判断して南流していたと考えられる。埋土は暗灰色砂1層である。

各流路の埋土からは弥生時代後期の土器や木製品、種子などが出土した。弥生土器には壺・鉢・高杯・器台・甕などがある。7は台付甕の台部分である。裾部径約6cm、現存高5cmを測る。外面はタタキ、内面はヘラでなでている。また、底部の接地面もなでている。生駒西麓の胎土である。

8は自然流路1で出土した木製品である。腐食が進んでおり、原形をとどめていない。現存長24.5cm、最大幅4.2cm、最小幅2cm、厚さ1cmを測る。広葉樹を使用している。



図1. 島上郡衙跡の調査位置図(1)

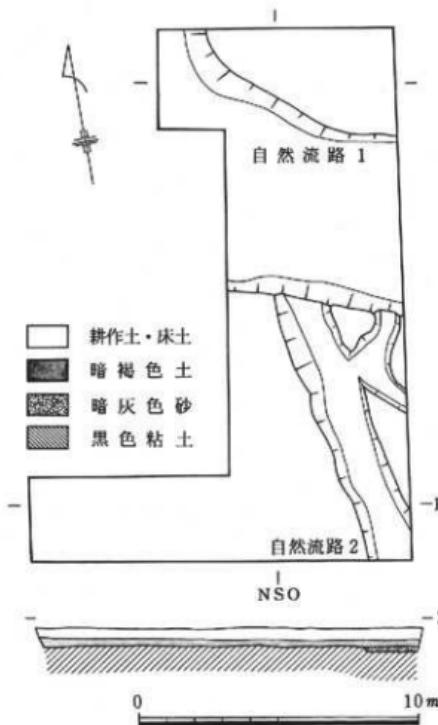


図2. 12-N地区 平面図・断面図

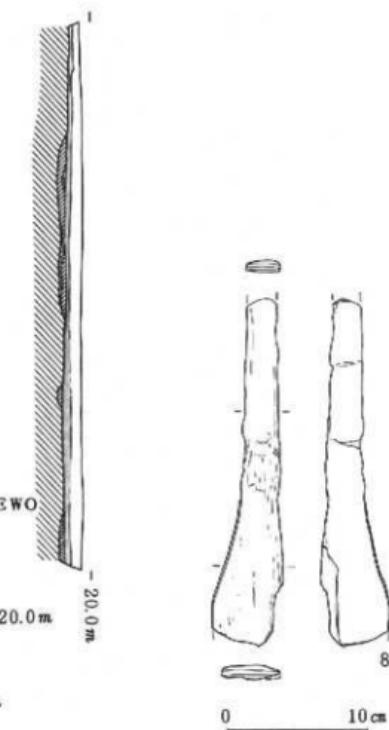


図3. 12-N地区 木製品(8)

用途は不明。そのほかに自然遺物として桃やヒョウタンの種子が出土した。

### 小 結

調査地周辺はこれまで遺構・遺物の希薄な地域として知られていたが、今回の調査では明確な遺構こそなかったものの、弥生土器や木製品を検出するなど新たな成果を得ることができた。自然流路は2条とも同時期に存在していたらしく、埋土からみれば一気に埋没したようである。遺物も両者の時期的な差は認められなかった。土器はあまりローリングを受けていなかったことから近接地から流されてきた可能性が高い。周辺に未発見の集落が存在するかもしれない。

(宮崎)

## 2. 鳥上郡衙跡（17-C・G地区）の調査

高槻市清福寺町806-1, 3, 4番地にあたり、小字名は清福ノ内と称する。現状は畠地である。このたび駐車場建設工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

### 遺構（図版第4・図5）

今回の調査地は、史跡境界線の北東約20mに位置し、遺構の分布が比較的濃密な地域にあたる。調査は南側に残された細長い畠地で、遺構の検出位置が深いことが予測されるため、重機を使用して耕土を東西に反転しておこなった。層序は耕地(0.2m)、床土(0.2m)、黒灰色土層(0.4m)、黒褐色上層(0.4~0.8m)〔遺物包含層〕、黄褐色礫土層〔地山〕である。検出した遺構は、竪穴式住居跡1基、土坑3基、溝2条、柱穴等がある。地山面の標高は、西端で15.5mを測り、東に向かって徐々に低くなっている。

竪穴式住居跡は、周壁の高さ約0.25mを測る方形のもので、東西辺約5m位と推測されるが、北・東側の大部分は調査区域外にあり明確でない。周溝及び4柱穴も床面が礫層のためか確認できなかった。埋め土は黒褐色土層が一層だけで、出土遺物は南西部の壁部から畿内第V様式の完形の甕が床面に接して出土しているが、全体的に遺物は少なく大部分が小破片である。土坑1は竪穴式住居跡のすぐ西側に位置し、大部分は調査区域外にある。埋土は同じ黒褐色土層が一層だけであり、弥生時代後期後半の土器片が少量出土している。土坑2は西側で東の一部分を検出した方形状のもので、深さは約0.4mを測るが大部分は西側の調査区域外にある。埋め土は黒褐色土層と黒褐色礫土層の2層からなり、下層の黒褐色土層から畿内第V様式でも前半期に属する高壙・長頸壺の完形品が破片に交じって出土している。土坑3は北西部に位置する浅い溝状のもので、幅約1.3m、深さ約0.1mを測るが大部分は調査区域外にあり、平面形は明確ではない。埋土は暗灰色砂礫土層が一層だけで、出土遺物は認められなかった。溝1は長さ約4m、幅約0.3m、深さ約0.15mの南北溝で、断面は浅いU字形を呈する。埋め土は黒灰色土層が1層だけで、土師器・瓦器片が少量出土している。溝2は幅約0.2~0.3m、深さ約0.1mの西側にカーブを描く南北溝で、埋土は溝1と同じく黒灰色土層の1層だけである。出土遺物は土師器・瓦器片が少量あり、中世に属すると考えられる。柱穴は径0.15~0.5mの大小のものが西調査区を中心に約40基程認められるが、調査区が狭小なため建物の規模・配置等は明確にできなかった。柱穴の中には柱根を残すもの、根石のように石を置いたものなどがある。時期は出土遺物からいずれも中世のものと考えられる。



図4. 鳴上郡衙跡の調査位置図(2)

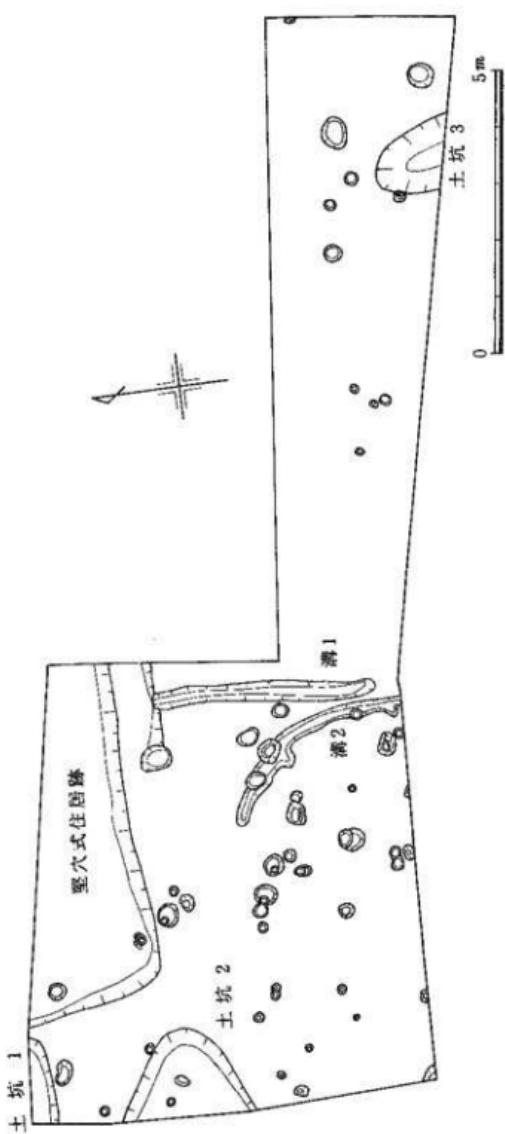


图 5. 17-C+G 地区 平面图

## 遺物(図版第5、図6)

今回の調査で出土した遺物は、弥生中期の上器片から古墳時代・平安時代・中世の各時代のものがコンテナ箱に4杯程ある。包含層から出土した遺物は、いずれも破片のものばかりで完形品に復元できたものは少ない。時代別に遺物の出土量を見ると、弥生時代後期後半のものと中世のものが大半を占めており、その他の時期のものは非常に少ない。

土坑2から出土した長頸壺(1)は、卵形の体部から少し外反する頸部がほぼ垂直に付き、頸部の下端に断続ナデによる細い粘土縁に張り付けが認められる。体部外面はナデ調整によって仕上げられているが、頸部は外面を縦ハケ調整後、口縁部の内外面は横ハケ調整によって仕上げている。焼成はほぼ良好で、色調は黒灰色を呈する。土坑2から出土した高杯(2)は、上縁部が大きく外反する大型のものであるが、残念ながら脚部は欠失している。外面はハケ調整後丁寧なヘラ磨きが施されており、口縁部の外面および内面はナデ調整によって仕上げられている。焼成はほぼ良好で、色調は赤茶褐色を呈する。土坑2から出土した高杯(3)は、深い椀に下半で外反する脚部が付く小型のもので、外面全体は丁寧なヘラ磨きが施されている。杯部内面はハケ調整後ナデ調整をしているが、内外面には小さな剥離痕が著しく認められる。透かし孔はほぼ中位に径1cmもの

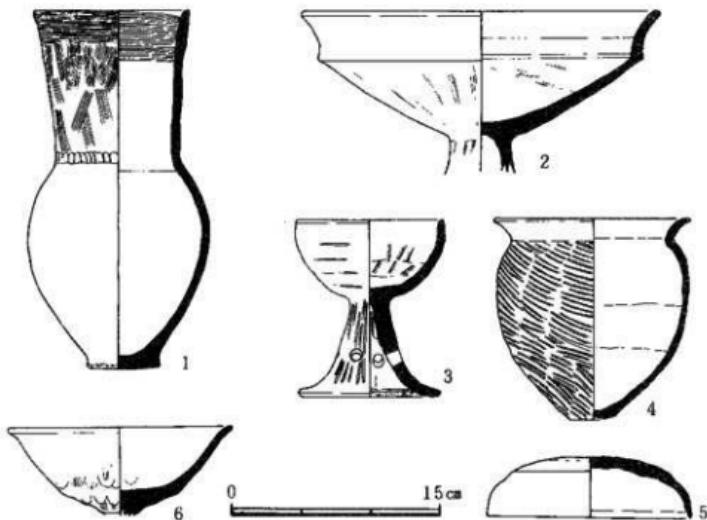


図6. 17-C・G地区 土坑2(1~3), 嚥穴式住居跡(4), 包含層(5・6)

が5ヶ所穿たれており、脚部の下面には乾燥時に付いた植物繊維の圧痕が残る。焼成はほぼ良好で、色調は赤褐色を呈する。竪穴式住居跡から出土した甕(4)は小型のもので、口縁部が大きく外反し、体部はやや胴の張った卵形を呈する。最大腹径は上から約3分の1の位置にあり、外面には右下がりの叩き目が施され、内面はナデ調整によって仕上げられている。中央部がわずかにくぼむ底部には「×」のヘラ記号が認められ、外面下半にはススが付着している。焼成はほぼ良好で、色調は淡黄褐色を呈する。包含層から出土した須恵器の蓋(5)は、天井部がゆるやかなカーブをえがき口縁部との境が明確でなく、天井部の回転ヘラ削り調整も2分の1程度しか行われていない。焼成はほぼ良好で、色調は黒灰色を呈する。包含層から出土した土師器の高杯(6)は、深い杯部が大きく外反するものであるが、脚部は欠失している。外面は指圧痕のうえにハケ調整が施されており、口縁部の外面および内面はナデ調整によって仕上げられている。焼成はほぼ良好で、色調は赤茶褐色を呈する。

### 小 結

今回の調査地は、史跡指定地のすぐ北側に位置するが、芥川が東側に接近して南流しているためか、嶋上郡衙に関連する直接的な遺構は認められなかった。これまで付近一帯の調査では、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて竪穴式住居跡・奈良時代から中世にかけての掘立柱建物群が多数検出されており、式内社・阿久刀神社から南側にかけては各時代を通じて集落の中心地であったことが知られている。今回の調査は小規模な範囲であったが、弥生時代から中世まで長期間にわたって住居地として利用されていたことが再確認された。

(大船)

### 3. 嶋上郡衙跡(38-D地区)の調査

高槻市清福寺町920-3番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立てる発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の東側中央部に位置し、遺構の分布が希薄な地域



図7. 嶋上郡衙跡の調査位置図(3)

である。調査は盛土が厚く堆積していることが予測されたため、小型ユンボを使用して届出地の南側に2m角のトレーナーを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.9m)、耕土(0.15m)、青灰色砂層(0.25m)、黄茶褐色砂質土層(1.2m以上)であるが小型ユンボの掘削範囲では明確な地山面まで達することができなかった。また遺物包含層である黄茶褐色砂質土層からも遺物はまったく検出することができなかった。

今回の調査地は、遺物包含層の堆積状況から推測して、すぐ東側を流れる芥川が古墳時代にはこの付近を流れていることが考えられ、さらに西側まで広がっていたことが考えられる。

(大船)

#### 4. 嶋上郡衙跡(38-N地区)の調査

高槻市清福寺町915-3番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西側中央部に位置し、以前の調査結果などから弥生時代中期の方形周溝墓群が広がっている地域である。調査は届出地の中央部に2m角のトレーナーを設け、人力で掘り下げ遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.2m)、耕土(0.2m)、床土(0.2m)、暗褐色土層(0.25m)〔遺物包含層〕、黄褐色礫土層〔地山〕である。今回の調査区内からは狭小なこともあるて遺構はまったく検出することができなかった。また遺物は暗褐色土層から畿内第V様式に属する壺腹片を数点出土しただけである。

(大船)



図8. 嶋上郡衙跡の調査位置図(4)

#### 5. 嶋上郡衙跡(43-F地区)の調査

高槻市郡家新町395-22番地にあたり、小字名は仮又と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西側中央部に位置し、遺構の分布が希薄な地域

である。調査は小型ユンボを使用して届出地の北東隅に東西2m、南北1mトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(1.2m)、耕土(0.2m)、青灰色粘土層〔地山〕であり、今回の調査区内からは遺構および遺物はまったく検出することができなかった。

(大船)

#### 6. 嶋上郡衙跡（43-G・H地区）の調査

高槻市郡家新町392・393番地において道路整備工事を行うため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。調査地は芥川廃寺の南西約200mにあり、現状は農道である。小字は仮又である。過去の調査例から付近は遺構・遺物の希薄な地域であることが判明しているため、掘削には重機を使用して地山面まで掘り下げた後人力で遺構検出作業を行なった。

基本的な層序は耕作土(0.2m)、暗青灰色粘土(0.1m)、淡茶灰色土〔整地土〕(0.1m)、暗黄褐色礫土〔地山〕である。地山は多少の起伏をまじえてゆるやかに東へ下降している。また、西端付近は谷地形となっていた。地山面の標高は、東端で約17mである。数点の土器器片が整地層より出土した以外には何も検出しなかった。

(宮崎)

#### 7. 嶋上郡衙跡（43-N地区）の調査

高槻市郡家新町395-42番地にあたり、小字名は仮又と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西側中央部に位置し、遺構の分布が希薄な地域である。調査は届出地の中央部に2m角トレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(1m)、耕土(0.2m)、黄褐色粘土層〔地山〕であり、今回の調査区内からは遺構および遺物はまったく検出することができなかった。

(大船)

#### 8. 嶋上郡衙跡（45-A・E地区）の調査

調査地は郡家新町314番地はかにあたり、小字名は宮脇と称し、現状は水路である。今回、水路改修の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って調査を実施した。

当該地は嶋上郡衙附寺跡（芥川廃寺、現在の神郡社付近）の南約100mに位置し、これに関連する遺構の検出が予想されたため、調査は新水路用地の全域を対象とし、幅2.5

m、長さ58mの南北に長い調査区を設けておこなった。

基本的な層序は、耕土・床土(0.25~0.3m)、整地層〔中央から南のみ〕(0.2~0.4m)、暗茶褐色土あるいは褐色土〔包含層、北端付近のみ〕(0.1~0.25m)で、淡緑色砂礫あるいは淡灰褐色粘質土の地山となる。地山面の標高は北端が16.4m、南端で15.7mを測り、北(芥川廃寺方面)に高く、南に低い地形となる。

現水路は調査区の全域にわたり地山まで掘り下げられており、特に南端付近は調査区幅全体にわたって擾乱が認められた。しかし北端付近では幅が狭くなり、水路の両側では包含層も確認できた。

#### 遺構(図版第6・図9)

遺構は土坑・柱穴等があり、すべて北端付近で検出した。しかし調査区が狭小なため、遺構としてのまとまりは不明である。

土坑1は調査区北端で検出したスリバチ状を呈するものである。現水路により大半こわされているが、復元すれば径1m程度の円形の平面形になると推測される。

土坑2は土坑1のすぐ南で検出した。大半は調査区外で、全形は不明である。検出した最大幅は2.7mを測り、包含層を切り込んでつくられている。なお二つの柱穴に切り込まれている。

土坑3は土坑2のすぐ南で検出した。大半を擾乱坑により、破壊されていたが、断面土層の観察によれば、幅2.7m以上の溝状の土坑になると想われる。この土坑も包含層を切り込んでつくられている。埋土は2・3ともに茶褐色土であり、いずれの土坑からも遺物は出土していない。

柱穴数個をやや集中して検出したが、建物等のまとまりはつかめない。柱穴の規模は径0.2~0.5mの小さなもののばかりで、またそのほとんどが確実に包含層を切り込んで掘った新しいものである。埋土はいずれも暗灰褐色粘質土である。

その他、土層断面の観察によれば、調査区中央付近の床土直下に近世の水路と思われる粗砂の堆積層がみられた。

#### 遺物(図版第6c・図10)

遺物は土師器・須恵器・瓦・石器等が、包含層あるいは整地層から出土し、その他近世水路から錢貨が出土した。しかし全体としては非常に少ない。

土師器・須恵器は包含層と整地層から出土したが、いずれも細片ばかりで完形に復元できるものはない。古墳時代~奈良時代にかけてのものである。

1は、包含層から出土した軒丸瓦瓦当部で、周縁を欠くが内区が約1/4残る。瓦当文

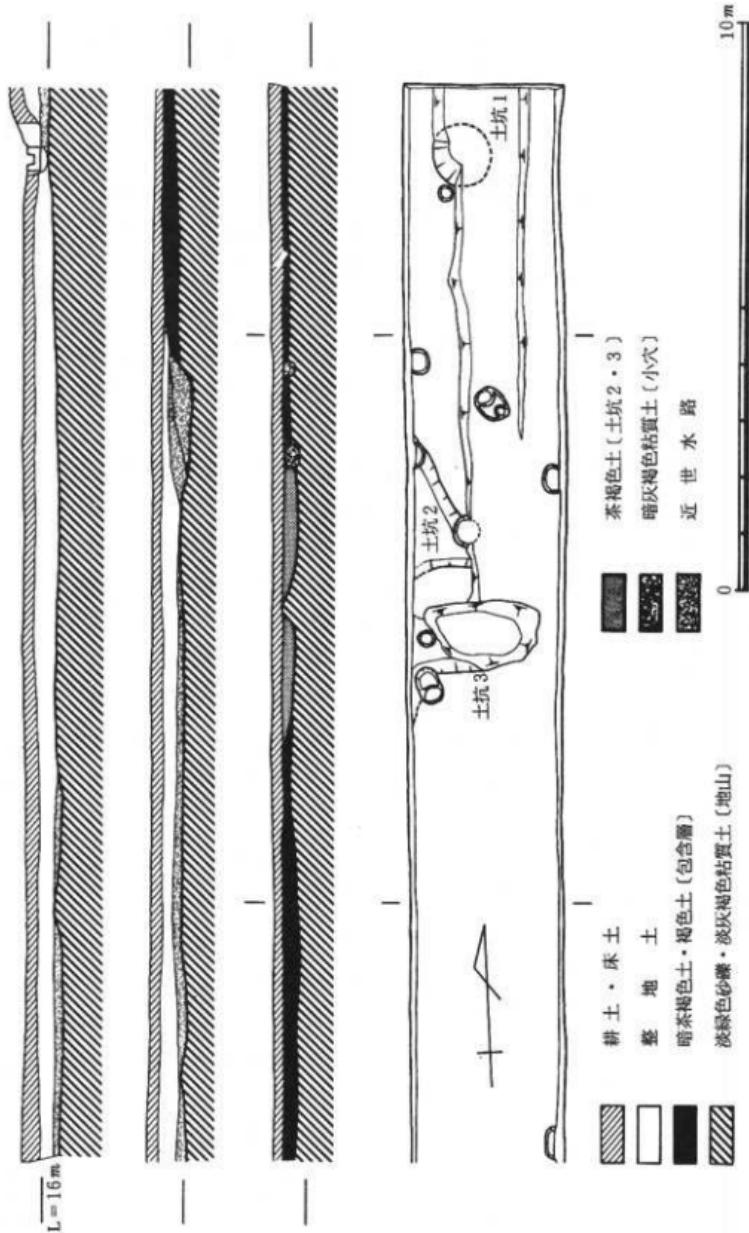


図9. 45-A-E地区 土層図・造構図(北端部のみ)

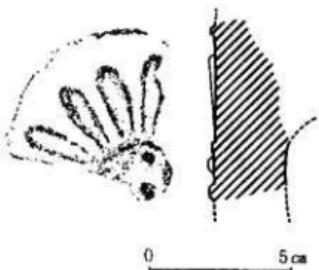


図10. 45-A・E地区出土 軒丸瓦  
(凸面繩たたき痕、凹面布目のこる)、丸瓦(凸面はナデ調整、凹面布目のこる)が2点づつ出土している。

3は、包含層から出土した玢岩製で表面をやや粗く加工して曲面を仕上げており、大型蛤刃石斧の破片とみられる。しかしその曲面から復元すると石斧にしてはやや大きすぎるくらいもある。

2は、近世水路埋上から出土した宝永通宝(宝永5年 1708年銅錢)である。全体的に薄く、彫りも浅い。表面は黒灰色。径3.5cmを測る。

### 小 結

今回検出した遺構のほとんどは、古墳時代から平安時代の遺物包含層を切り込んでつくられており、中世以降のものと考えられる。また調査区が狭小で、しかも現代の水路が地山面までおよんでいることもあり、当初期待された芥川廃寺に関連する明確な遺構は検出できなかった。

一方、包含層からの出土とはいえ、芥川廃寺瓦窯軒丸瓦A類が出土した意義は大きい。これまで、軒丸瓦A類は生産地である瓦窯跡以外は出土例が皆無であった。今回、芥川廃寺のすぐ南で出土したことにより、軒丸瓦A類は芥川廃寺に供給されていたことがほぼ確実となった。瓦窯跡は芥川廃寺の西北約500mに位置し、軒平瓦の同範関係から芥川廃寺付属の瓦窯であると考えられてきたが、それをさらに補強する結果となった。

また遺物でいえば、大型蛤刃石斧であろうとした玢岩製品も興味深い。石斧にしては大きすぎる点を指摘したが、ここでは芥川廃寺に関わる何らかの施設、すなわち扉の軸受部であろうとするのもあながち的はずれでないかもしれない。

今回の調査により、芥川廃寺についての新知見を得ることができた。今後の周辺地域の調査が期待される。

(高橋)

### 9. 島上郡衙跡（48-I地区）の調査

高槻市川西町一丁目953-15番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の東側中央部に位置し、弥生時代中期の方形周溝墓群が広がっている地域の南側にあたる。調査は届出地の中央部に2m角のトレンチを設け、小型ユンボを使用して遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(1.8m)、耕土(0.15m)暗褐色土層(0.25m)〔遺物包含層〕、黄褐色土層〔地山〕である。今回の調査区内からは狭小なこともあって遺構・遺物はまったく検出することができなかった。(大船)

### 10. 島上郡衙跡（48-P地区）の調査

調査地は高槻市川西町1丁目966番地にあたり、旧山陽道である西国街道に面している。小字名は川西北浦である。今回住宅建て替え工事の目的で、土木工事に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って調査を実施した。

調査は、東西1.6m、南北1.0mの調査区を設定しておこなった。層序は、客土(0.2m)、黒灰色土(0.15m)、暗褐色土(0.1m)、暗灰色土(0.1m)、灰褐色砂礫〔地山〕である。もとより遺構の希薄な地域に加えて調査区が狭小であるため、島上郡衙に関連する遺構・遺物はみつからなかった。しかし、黒灰色土からは若干の陶磁器片・瓦片が出土しており、近世以降の整地層とかんがえられ、旧山陽道との関係が注目される。(高橋)

### 11. 島上郡衙跡（55-J・K・L地区）の調査

調査地は、高槻市郡家新町250番地ほかにあたり、小字名は高津である。現状は水路である。今回水路改修の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って調査を実施した。

当該地は、芥川庵寺と推定される神郡社から南約250mに位置し、北側では奈良時代の居宅と考えられる掘立柱建物数棟ほか〔「45-J・K・N・O地区の調査」「55-A・B・E・F地区の調査」〕『島上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・7』1983年、高槻市教育委員会。以下『概要』とする〕が、一方南側では、山陽道及び、上記の掘立柱建物群を区画すると考えられているL字に屈曲した溝ほか〔「55-L・P地区の調査」「概要・2」1978、「55-I・M地区の調査」「概要・10」1986〕が検出されている。今回、このような地域の中央部を調査するにあたり、山陽道と掘立柱建物群、あるいは山陽道と芥川庵寺との

関係に新知見が得られるものと期待された。

調査は幅3~4m、長さ83mの東西に長い調査区を設定しておこなった。

基本的な層序は、耕土・床土(0.2~0.4m)、整地土(0.2~0.5m)、暗褐色土ないし灰褐色砂質土[包含層、東端のみ](0.1~0.2m)で、淡緑色砂礫、東端では黄灰色粘土の地山となる。

地表面の標高は東端で14.85m、西端で15.10mで、やや西に高い地形となっている。

#### 遺構・遺物（図版第7・図11）

検出した遺構は、土坑、溝、柱穴、近世水路があり、その他自然流路とみられる砂層の堆積がみられた。

土坑1は調査区東端付近で検出された不定形の土坑で、南側は調査区域外に延びる。埋土は黒褐色土だが、質的には包含層である暗褐色土と共通する。

土坑2は土坑1の西側で検出した。土坑1と同様に、大半は調査区外にあり、埋土も黒褐色土である。土坑1・2はともに全容が明らかでないため性格は不明であるが、おそらく人為的な遺構ではなく、くぼみ状のものかもしれない。

土坑3は調査区中央で検出した。南肩を近世水路によって壊されている。埋土は暗灰色微砂で、古墳時代の須恵器（甕破片）が出土した。

土坑4は土坑3の西側で検出した方形の土坑とみられるが、やはり北側が調査区外に延びていて、全容は不明である。埋土は黒灰色粘土で上面近くはやや色が淡い傾向がある。

溝1、2は土坑4の両脇で検出した。溝1は幅1.5mのゆるやかに内湾する溝である。約3m分を検出したが、北側は調査区外に延びている。溝2は最大幅約3m、南端を近世水路にこわされている。やはり調査区外へ延びていて、約4m分を検出した。埋土上面から土師器・鍋破片が出土した。两者とも埋土は黒灰色粘土である。

柱穴は調査区東端付近で4個検出した。大小様々だが、どれも非常に浅く（深さ10cmに満たない）、埋土が黒褐色土である点で共通する。

近世水路はおよそ調査区全域にわたって検出した。一部南肩部が調査区外となるが、幅2~2.5m、長さ60m分を検出した。西方では二叉に別れ、一方は屈曲して北方へ、他は西北方へ延びる。木杭を打ち込んで護岸としており、横木をわたす部分もみられる。木杭の間隔は平均すれば0.2~0.3mとなろうが、全体としては一定でなく、特に屈曲部は密集して打ち込んでいる。屈曲部以外の木杭密集部分には横木、および礫をつめこんだ形跡があることから橋状の施設があったものと思われる。埋土からは、少量の土師器、須恵器、そして多量の陶磁器片が出土した。

調査区中央から西寄りでは、自然流路と思われる砂質・微砂質・粘土の堆積がみられ

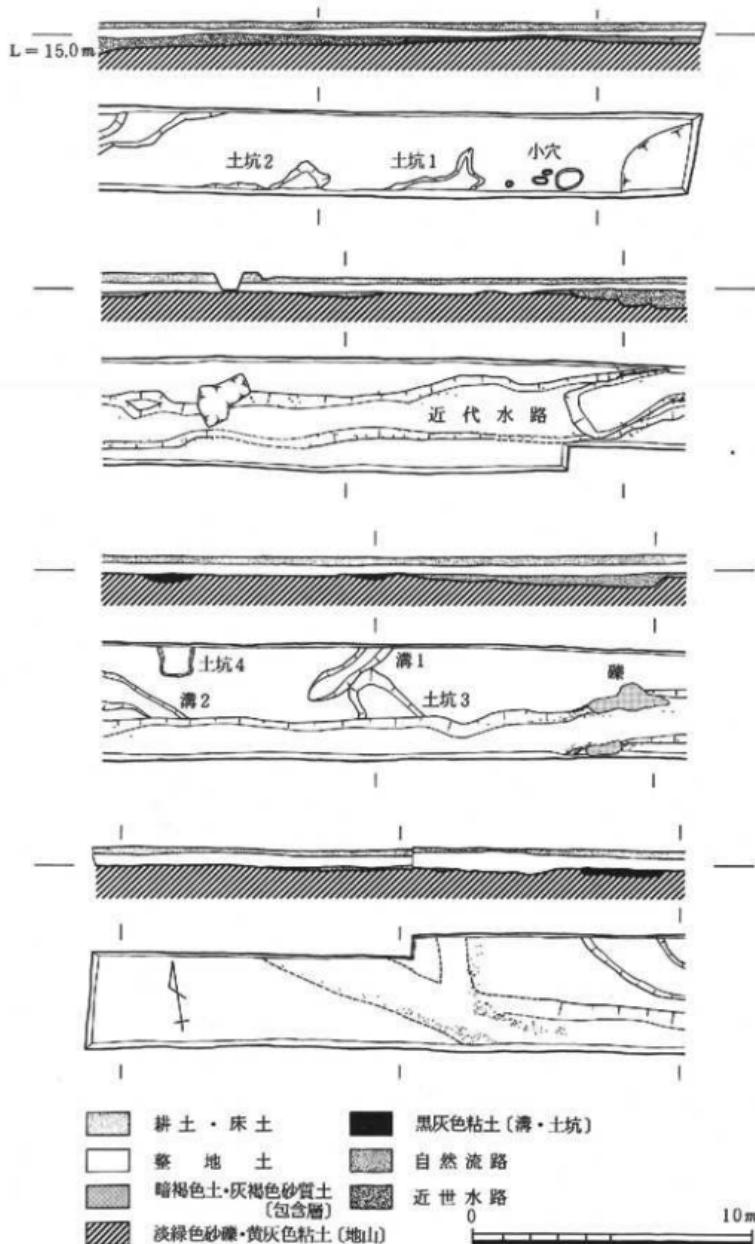


図 11. 55-J・K・L 地区遺構図・土層図

る。当調査区北側の調査（『概要・7』参照）によると幾筋もの自然流路が西北から南東に延びていることが判明しているので、これらと一連のものと思われる。

遺物としては、遺構から出土したものの他に、東半の包含層からは古墳時代中期から後期の土師器・須恵器、整地層の西半部では奈良時代後半以降の土師器・須恵器・瓦がある。いずれも小破片のため全体を復元できるものはない。

### 小 結

今回の調査では、当初期待されたような成果をあげることができなかった。調査区の大半を近世水路が占め、近代の整地がなされた悪条件であるとはいえ、検出した遺構が極端に少ないということは、奈良時代当時も当地は空間地帯であったと考えられる。調査区中央部は自然流路の堆積状況が顕著であることからみて、おそらく居住に適さなかつたのであろう。

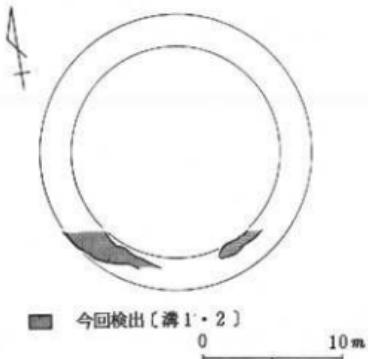


図12. 円墳想定図



図13. 川西古墳群分布図

数少ない検出した遺構の中から、溝1・2についてふれてみよう。両者はゆるやかに内湾する溝だが、これらは古墳の周溝の削平をうけたのちの名残りともかんがえられるのである。残存状況から推定すると、周溝幅2.7m以上、墳丘径18m程の円墳と考えられる。当地の南側では川西古墳群が分布しており、溝1・2を古墳とすれば群中の最北の古墳ということになる。しかし埴輪等の遺物が溝内から出土せず、上面ではあるが奈良時代の鍋破片が出土していること、川西古墳群の円墳としては規模が大きく、やはりやや北に寄りすぎていることなど、否定的な材料もある。鍋破片については上面からの出土であり、後の混入と考えれば問題はない。いずれにしろ、そのほとんどが調査区外

なので詳細は不明といわざるを得ないが、今後の予察として報告しておく。 (高橋)

## 12. 島上郡衙跡 (73-P地区) の調査

高槻市郡家新町149-1番地にあたり、小字名は藤ヶ本と称する。現状は住宅地である。このたび個人住宅新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西南部に位置し、遺構の分布が希薄な地域である。調査は届出地の南側中央部に東西5m南北1mのトレンチを設け、人力で遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.5m)、耕土(0.15m)、青灰色粘土層〔地山〕で、調査地が狭小なこともあって遺構・遺物はまったく検出することができなかった。(大船)



図14. 島上郡衙跡の調査位置図(5)

## II. 氷室塚古墳

### 13. 氷室塚古墳の調査

高槻市氷室町二丁目571-10番地にあたり、小字名は塚後と称する。現状は宅地である。このたび文化住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北東部に位置し、すぐ東側を府道秩谷一西五百住線が南北に走っている。調査は届出地の北東部に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層



図15. 氷室塚古墳の調査位置図

序の観察をおこなった。層序は盛土(0.6m)、耕土(0.2m)、床土(0.2m)、暗灰色粘土層(0.4m)、青灰色疊層〔地山〕である。今回の調査では調査範囲も狭小なこともあって、氷室塚古墳に関連する遺構および遺物はまったく検出することができなかった。

(大船)

### III. 宮田遺跡



図 16. 宮田遺跡の調査位置図

#### 14. 宮田遺跡の調査

高槻市宮田町三丁目2543-2番地にあたり、小字名は鎌木と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の中央部南側に位置し、春日神社の南約200mにあたる。これまで南地区一帯はほとんど調査が行われたことがなく、昨年東約100mの地点で縄文時代後期から晩期にかけての浅い谷地

形が検出されている程度である。調査はまず遺構の確認と層序の観察をおこなうため、申請地に幅2m、長さ40mのトレンチを南北に3本設けておこなった。各トレンチの基本的な層序は耕土(0.2m)、床土(0.2m)、茶灰色土層(0.2m)、灰褐色土層(0.1m)、暗灰色砂疊層〔地山〕であり、東南部に低くなる地形にむかって茶灰色・灰褐色土層が薄く堆積していた。今回の調査では遺構はまったく検出することができず、自然の東西流路を1条発見しただけである。流路は北約10mの位置をほぼ東西方向に、幅約3m、深さ約0.5m規模のものが蛇行して流れしており、流木を少し含んだ黒褐色粘土～砂層が互層で堆積していた。

宮田遺跡はこれまでの調査結果から、北側に住居地域が一列に並ぶように形成され、南側一帯は水田跡が広がっていると推定されていた。しかし、今回の調査では、水田跡

に伴う溝・畦などの遺構はまったく検出することができず、地山面に砂・砾の層が部分的に認められるなど水田以外の状況が推定された。遺物は東トレンチの床土から瓦器・土師器片が数点出土したが、いずれも細片であって客土中に交じって運ばれてきたものである。また中央トレンチの茶灰色土層からは、単独でサヌカイト製の削器が1点出土している。削器は流状構造が著しいサヌカイトが使用され、薄い刃縁に両面から丁寧な調整が施されている。時期は明確でないが弥生時代の不定形刃器に形態は良く似ている。

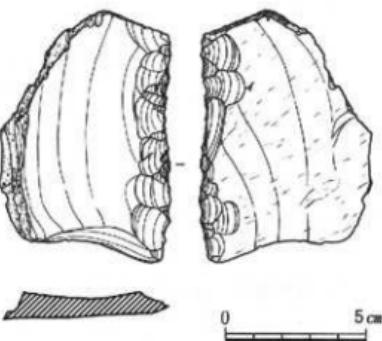


図17. 宮田遺跡出土の石器

(大船)

#### IV. 富田遺跡

##### 15. 富田遺跡(89-1)の調査

高槻市富田町4丁目2543-2番地に位置し、小字は市西ノ口町である。現状は宅地であって住宅建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

調査はまず届出地内に2.5m×3mのトレンチを設定し、重機で盛土を除去した。その後人力で地山面まで掘り下げて遺構・遺物の検出作業をおこなった。層序は整地土(0.2m)、黄灰色粘土〔地山〕である。

##### 遺構・遺物

検出した遺構はピット1個と土坑2基である。ピットはトレンチ北側で検出し、直径・



図18. 富田遺跡の調査位置図

深さともに0.2mを測る。埋土中より弥生時代後期の土器片数点と若干の焼土塊が出土した。土坑1はトレント西端で検出した。南北2.2m、東西1.2m以上あり西側へ続く。深さは0.5mで埋土は炭・焼土を含む黒色土である。土坑2は東端で検出し南北2.5m以上、東西0.8m以上あり大半は調査区外へ広がる。埋土は淡茶灰色土である。

土坑1・2は出土遺物が皆無だったのでどの時代に帰属するかは判然としない。周辺の調査状況からみて近世頃と考えられよう。  
(宮崎)

#### 16. 富田遺跡(89-2)の調査

高槻市富田町6丁目2553番地にあたり、小字は市中ノ町である。現状は宅地である。今回の調査は住宅の新築工事が計画されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って実施したものである。

調査は、まず届出地内に2.5m×3mのトンレチを設定し重機で表上を除去した。その後人力で掘削して遺構の検出作業をおこなった。層序は盛土〔整地層〕(0.3m)、黄褐色礫土〔地山〕であり、遺物包含層は認められなかった。

検出した遺構は土坑3基と井戸1基である。土坑1は1辺0.6m以上、深さ0.8mを測り、調査区外へと広がる。埋土中より16世紀頃の備前大甕片が出土した。土坑2は1.8m×0.8m、深さ0.3mである。出土遺物は無い。土坑3は直径0.8mの円形で備前大甕が据えてあったが上半部は削平され、井戸掘削時に一部破壊されていた。井戸は直径約1mの樽を埋めて井戸枠としていた。この井戸枠上には蓋をするように板をかぶせていましたので、井戸内部の調査を行うために持ちあげたところ、地下水が噴出し続け調査続行が困難となつたため、埋め戻し作業を実施して調査を終了した。  
(宮崎)

#### 17. 富田遺跡(89-3)の調査

高槻市富田町2674-1番地にあたり、小字名は西ノ町と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の中央部南側に位置し、谷地形になっていることもある。これまでの調査でもほとんど遺構が検出されていない地域にある。調査は届出地の北東部に2m角のトレントを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.2m)、黄色粘土層〔地山〕であり遺物包含層は確認できなかった。今回の調査では遺構はまったく検出することができず、遺物もまったく検出することができなかった。  
(大船)

## V. 郡家今城遺跡

### 18. 郡家今城遺跡（89-1）の調査

調査地は高槻市水室町1丁目769-16・17番地あたり、小字は下河原である。遺跡の北東部に流れる女瀬川が東から南へ屈曲する地点に位置し、遺構・遺物の希薄なところである。今回の調査は個人住宅の建て替えにさきだって実施した。届出地内に1.5m×1.6mのトレーニングを設定し、人力で地山面まで掘りさげた。層序は盛土(0.4m)、旧耕土(0.2m)、黄灰褐色粘土層〔地山〕である。トレーニング北東隅で土坑を1基検出した。直径2m程度の円形を呈していると思われるものの、大半は調査区外にある。深さは0.4mを測り、底部はフラットである。埋土は2層認められた。上層は暗黄灰色砂質土で黄灰褐色砂質土（地山）と暗褐色土（包含層か）のブロックを含んでいる。下層は暗灰色砂質土であり、やはり黄灰褐色粘土層がブロック状に混入している。遺物は上下両層から出土した奈良～平安時代の土師器細片と銅製品1点がある。銅製品は3cm×2.5cmの五角形状を呈し厚さは0.5cmを測る。重量は15gである。全体に腐食が著しく、全容を知ることができない。部分的に格子状の文様が看取できる。反り具合いや断面の形状からみて、直径12cm程度の鏡の一部分と考えられる。



図19. 郡家今城遺跡の調査位置図

(宮崎)

### 19. 郡家今城遺跡（89-2）の調査

郡家今城遺跡は女瀬川・芥川が形成した低位段丘上に展開する旧石器・奈良～平安時代の遺跡である。その範囲は大阪府立三島高校を中心として東西・南北とも約300mと推定されている。

調査地は府立三島高校の西側、高槻市水室町1丁目773番地に位置する。現状は水田で小字は下河原である。今回の調査は住宅建設が計画されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って実施した。調査面積は約1,000m<sup>2</sup>である。表土掘削には重機を使用し、その後人力で遺構検出作業を行った。また、排土の関係から調査

地を南北に分割し反転して調査を実施した。

基本的な層序は耕作土(0.3m)、床土(0.1m)、黄褐色粘質土〔整地土〕(0.1m)、黄灰色粘土〔地山〕である。地山面の標高は約19.3mであり、北西から南東へ向かってゆるやかに傾斜している。

なお、地山はかなり削平を受けており、遺物包含層はほとんど検出できなかった。

#### 遺構(図版第9~14・20)

今回の調査で検出した遺構は山陽道跡、掘立柱建物、柵、井戸、土坑、溝、落ちこみなどである。その他近世~現代の瓦製作用粘土の採取坑があった。以下遺構ごとに記述する。なお、方位は磁北を使用した。磁北は北で真北より $6^{\circ} 20'$ 西へ振っている。

#### 山陽道跡

山陽道跡は調査区北端を東西に横切った状態で検出した。路面には黄褐色~黄灰色土を用いて整地した後、南北両側に側溝を掘削している。整地土には多数の土器が混和されたような状態で含まれていた。側溝には切り合いがあり、改修されている。規模がわかる側溝1・2間は溝心々で約6m、路面幅は5m前後である。

側溝1は北側で検出した。わずかに蛇行しながら東西にのび、幅1m、深さ0.3mを測る。断面の形状は逆台形状を呈し、底はフラットである。埋土は暗灰色土で土師器・須恵器・綠釉陶器などに混じって石製の丸薬が出土した。

側溝2は側溝1の南約5mで検出した。側溝1に平行してのび、規模は幅1m、深さ0.3mと側溝1と同規模である。断面の形状は逆台形ないしU字形を呈している。埋土は暗灰色土である。土師器・須恵器・黒色土器が出土した。

側溝3は側溝2の南側で検出した。掘削前に整地を行い、埋没後側溝2に切られている。規模は幅1.5m、深さ0.3mである。断面の形状は逆台形を呈し、埋土は淡灰色土~淡灰色粘質土である。8世紀頃の土師器・須恵器片が少量出土した。

#### 掘立柱建物

合計14棟出土した。これらの多くは調査区東側に集中し、重複する建物も多い。

掘立柱建物1は調査区北東側で検出した南北棟である。規模は梁行2間(4.3m)×桁行5間(9m)であり東側には幅1.6mの庇がつく。庇北端の柱穴は検出できなかった。面積は身舎で38.7m<sup>2</sup>、全体で96.8m<sup>2</sup>を測る。軸方向はN-5.5°-Eを示す。柱掘形は1辺0.5m~0.6mの方形を呈し、深さ0.3~0.4mを測る。埋土は暗灰色砂質粘土である。掘立柱建物4・6・7と重複している。

掘立柱建物2は調査区西寄りに位置する。規模は梁行2間(4.6m)×桁行3間(6m)

で面積は $27.6\text{m}^2$ である。軸方向はN-5.5°-Eを示す。掘形は1辺0.6~0.8mの方形を呈し、深さは0.3~0.6mを測る。埋土は暗灰色粘土である。直径約0.3mを測る柱根が遺存していた。溝1に切られている。

掘立柱建物3aは掘立柱建物2の東側に位置する。2間(3m)×2間(3m)の縦柱建物で面積は $9\text{m}^2$ である。プランからみて倉庫である。軸はN-3°-Eである。掘形の形状は1辺約0.7mの方形を呈し、深さは0.4~0.8mを測る。埋土は灰色粘土である。掘形南側には柱を抜き取った痕跡が認められた。

掘立柱建物3bは掘立柱建物3aの建て替えである。わずかに南側へ移動して建てている。2間(3m)×2間(3m)、面積 $9\text{m}^2$ と掘立柱建物3aと同規模である。軸はN-5.5°-Eとやや東へ振っている。柱穴は1辺0.6~0.7mの方形を呈し、深さは約0.5~0.7mを測る。埋土は暗灰色粘土と黄灰色粘土のブロックである。柱根は遺存しなかったが、径0.3mの柱痕跡が認められた。

掘立柱建物4は調査区中央部に位置する。規模は梁行2間(3.9m)×桁行5間(12m)であり、面積は $46.8\text{m}^2$ である。軸の方向はN-4°-Wを示す。柱掘形の形状は直径0.2~0.3mの円形を呈し、深さは0.3mを測る。埋土は暗灰色土である。掘立柱建物1・5を切っている。

掘立柱建物5は梁行1間(4m)×桁行3間(6.9m)の東西棟であり、東西の棟持ち柱は検出しなかった。面積は $27.6\text{m}^2$ である。軸方向はN-7°-Wを示す。柱掘形の形状は直径約0.3mの円形で深さは約0.2mを測る。埋土は暗灰色土である。5m東側に溝1をともなう。掘立柱建物4に切られている。

掘立柱建物6は掘立柱建物1と重複して検出した南北棟である。規模は梁行2間(3.6m)×桁行5間(8.9m)、面積は $32\text{m}^2$ である。底は無かった。軸方向はN-0.5°-Eである。柱掘形は1辺0.6mの方形で深さ0.5mを測る。位置・規模からみて掘立柱建物1に先行する建物と考えられる。掘立柱建物7を切っている。

掘立柱建物7は掘立柱建物1・6と重複して検出した。南北棟である規模は梁行2間(4m)×桁行3間(4.5m)の縦柱建物である。面積は $18\text{m}^2$ 、軸方向はN-1°-Wを示す。柱掘形は1辺0.6~1m、深さ0.4~0.6mを測る。底には1辺0.3m程度の根石を据えていた南西側柱の根石は特に大きく $0.7\times 0.5\times 0.2\text{m}$ の河原石を用いていた。倉庫と考えられ、他の建物と比較して柱掘形も大きくかつ根石を伴うなど頑丈なつくりを連想できる。

掘立柱建物8は調査区南西隅に位置する。梁行2間(2.6m)×桁行2間(3.3m)の南北

棟である。東柱は検出しなかったが、平面形から倉庫と考えられる。方向はN-17°-Eと今回検出した遺物の中で最も東に振っている。面積は8.6m<sup>2</sup>である。柱掘形は1辺0.7m前後の方形を呈し、深さは0.5~0.8mを測る。埋土は黄灰色砂質粘土で地山（黄灰色粘土）との見分けがつきにくい。溝1に切られている。

掘立柱建物9は調査区南側に位置している。規模は梁行2間(3.8m)×桁行4間(7.6m)、面積28.9m<sup>2</sup>を測る南北棟である。軸方向はN-3°-Eである。柱掘形の形状は1辺0.7~0.9mの方形を呈し、深さは0.4~0.7mを測る。埋土は暗褐色土である。掘立柱建物10・11・13に切られている。

掘立柱建物10は掘立柱建物9と重複して検出した南北棟である。梁行2間(3.9m)×桁行3間(6.3m)、面積は24.6m<sup>2</sup>である。軸はN-5.5°-Eを示す。柱掘形の平面形は1辺0.6~0.7mの方形を呈し、深さは0.3~0.4mである。埋土は暗褐色土で黄褐色土がブロック状に入っていた。また南側妻柱には直径約0.2mの柱根が遺存していた。切り合いや位置関係からみて、掘立柱建物9を1間分南側へ建て替えたと考えられる。

掘立柱建物11は調査区東端で検出した東西棟である。梁行2間(3.8m)×桁行3間以上(6m以上)で東側は調査区外にある。梁の軸方向はN-7°-Eである。柱掘形の平面形は1辺0.7~0.8mの方形で深さは0.4~0.8m、平均で0.5mを測る。埋土は暗灰色土と黄褐色土が混ざりあった状態であり、中央で暗灰色粘土の柱痕跡を検出した。そのうち4個の柱穴では直径0.3mを測る柱が遺存していた。掘立柱建物9・13を切っている。

掘立柱建物12は調査区南東隅、掘立柱建物9・10の東側で検出した。規模は2間(3.2m)×2間(3.2m)、面積は10.2m<sup>2</sup>である。軸方向はN-7°-Eを示す。柱掘形は1辺0.5~0.7mの方形を呈し深さは約0.4mである。東柱にあたる中央の柱穴内には0.2m四方の河原石が根石として据えられていた。

掘立柱建物13は調査区南東部で検出した倉庫である。規模は2間(3.1m)×(3m)、面積は9.3m<sup>2</sup>である。軸方向はN-7°-Eである。柱掘形は1辺0.5~0.7mの方形を呈し、深さは0.3~0.7mとばらつきがある。南西隅の柱穴には柱を抜き取った跡が認められた。掘立柱建物11に切られている。

掘立柱建物14は調査区東端で検出した東西棟である。梁行2間(3.6m)×桁行2間以上(3.5m)の規模で東側は調査区外にある。軸はN-7°-Eを示す。柱掘形は1辺0.7~0.8mの方形を呈し、深さは約0.5mを測る。

#### 棚

棚1は調査区北側、掘立柱建物1・6・7と重複して検出した。南北3間(6.7m)分

あり柱間は北から2.4m、2.3m、2mと一定しない。柱掘形は直径0.3mの円形もしくは隅丸方形で深さは0.1~0.2mである。方向はN-7°-Wを示し、掘立柱建物5の聚方向と一致する。

柵2は調査区南西部で検出した。南北方向で5間分ある。柱間は北側から1.9m、2m、1.6m、1.95m、1.85mで平均柱間は1.86mである。柱掘形は約0.2mの円形で、深さは0.1~0.2mである。方向はN-3°-Eを示し、掘立柱建物3a・9と一致する。

#### 井戸

井戸1は調査区西端で検出した。掘形は1m×1.2mの方形で深さは0.85mを測る。部分的に石組みが残存しているが、大半は廃絶時に崩壊している。石組みに使用した石は0.1m×0.3m程度の河原石である。砥石を転用していたものもある。内法は復元径で約0.4mを測る。底より9世紀初め頃の土師器杯が完形で出土した。

#### 土坑

土坑は7基検出した。掘立柱建物の周囲に点在し、うち6基は検出状態が良好でなく出土遺物も少ない。比較的状態の良い1基のみ記述する。

土坑6は調査区南東隅で検出した。幅1m、長さは1.5m以上で南側は調査区外へ続く。深さは0.3mを測る。埋土は暗褐色土で焼土をわずかに含んでいる。奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

#### 溝

約20条検出した。そのうち溝1を除くすべてが小規模な溝である。

溝1は調査区西側で検出した南北溝である。幅1.2~1.5m、深さは約0.2mで北端部付近は0.5mと深くなっている。埋土は暗灰色粘質土である。断面の形状は底の平坦なU字形である。検出長は約30mを測り、南端は途切れ終わっている。ほぼ直線的に掘削されており、その方向はN-3°-Eと柵2に平行する。掘立柱建物2・8、山陽道側溝3を切っている。出土遺物は比較的多く、土師器・須恵器・綠釉陶器・黒色土器・平瓦・製塩土器などのほかに土馬が出土した。周辺の状況から判断すれば水路と考えるより、土地の区画などに関連する遺構としたい。

小溝は調査区南半、特に南西部に集中して検出した。幅0.3m前後、深さ0.1mで断面の形状は逆台形である。埋土は暗灰色粘土である。遺構の密度が低い場所で多く検出する。出土遺物は少なく時期の決め手に欠くが、切り合いからみれば南西部で掘立柱建物8以降溝1以前になる。鋤溝等の耕作痕と考えられる。

#### 遺物(図版第15~18、図20~23)

今回の調査では旧石器や奈良～平安時代の土器や土馬、鉢などが出土地した。しかし調査区の大半は削平を受けているために出土量はわずかなものとなっている。以下、遺物の種類ごとに概略を述べる。

#### 土器（1～31）

土器は調査区のほぼ全域から出土する。量的には山陽道整地土内や溝1からが多い。時期的には8～9世紀の土師器・須恵器が大半で、その他に黒色土器や施釉陶器もわずかだが出土する。

#### 土師器・須恵器

土坑6より土師器杯(1・8・9)、皿(10)、高杯(11・12)、鉢(14・15)、壺(4・13)、須恵器杯(5)が出土し、その他に製塙土器(16・17)、焼土塊(18・19)がある。杯(1)は口径13.5cm、器高3.5cmを測る。底部からゆるやかに内傾しつつ口縁へ移行し、端部は丸く肥厚している。色調は明茶灰色である。暗文は無い。高杯は2点出土した。两者とも杯部片で、端部は肥厚する。11の内面には斜方射暗文が残る。壺(4)は上半部のみ検出した。口径27.9cm、現存高22cmを測る頸部のややしまった長胴の壺である。口縁は外側へむかってまっすぐにのび、端部は肥厚する。外面はタテハケ、内面は指でなであげている。色調は淡茶灰色である。須恵器杯(5)は口径16.7cm、器高5cmを測り、高台は低く底部外縁を巡る。色調は淡灰色である。

井戸1からは完形の土師器杯(3)が出土した。口径12.8cm、器高3.5cmを測り底部外縁に高台が巡る。口縁部は内面をヨコナデ、外面はヘラケズリ後にヘラミガキを施している。ヘラミガキには大きく6つの単位が認められる。色調は淡灰褐色を呈し、外面には黒斑が認められる。時期は9世紀初～前半頃である。須恵器壺(6)は扁平な底部から丸くやや胴の張った体部がのび、頸部は細く短い。口縁は外反し端部は内傾し面をもつ。底は平底で外面には糸切り痕が看取できる。落ちこみ1出土。その他、糸切り痕の残る須恵器は山陽道整地土や側溝、溝1などから出土した。掘立柱建物4から糸切り後に三日月高台を貼りつけた10世紀前半頃のものが出土している。

#### 黒色土器

山陽道整地土、側溝、掘立柱建物1などからわずかに出土したが、図示できるものは無かった。

#### 墨書土器

山陽道整地土より須恵器壺(7)が1点出土した。底部片で外面の高台内側に記している。3文字あると思われるが最初の文字が「四」である以外は判読できなかった。

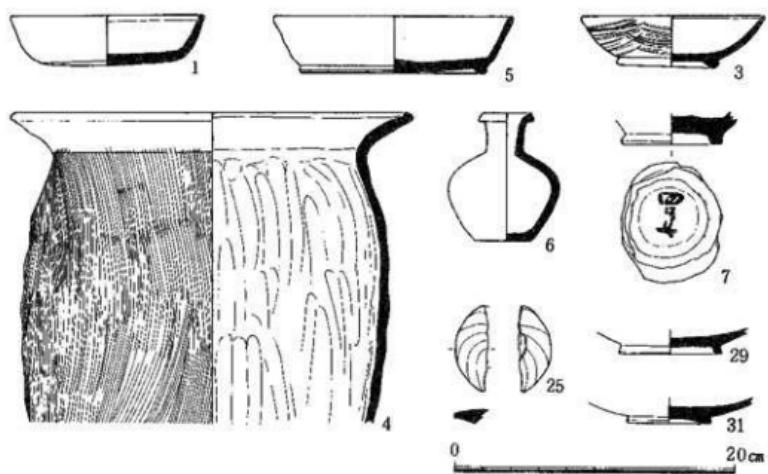


図20. 郡家今城遺跡(89-2) 土器 井戸1(3),土坑6(1・4・5),落ちこみ1(6),  
山廻道整地土(7・29・31),包含層(25)

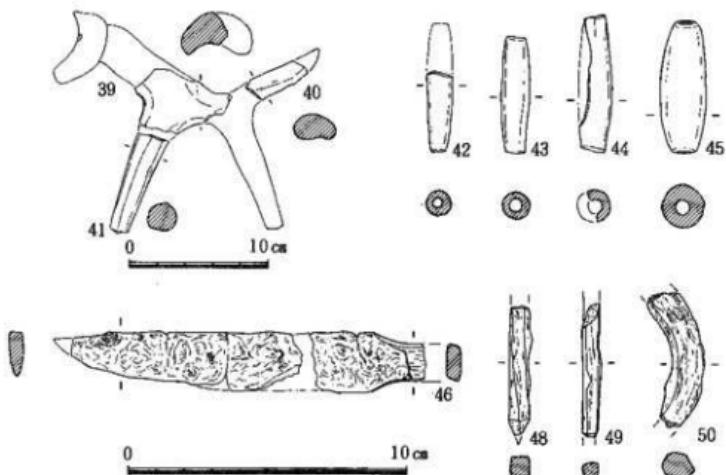
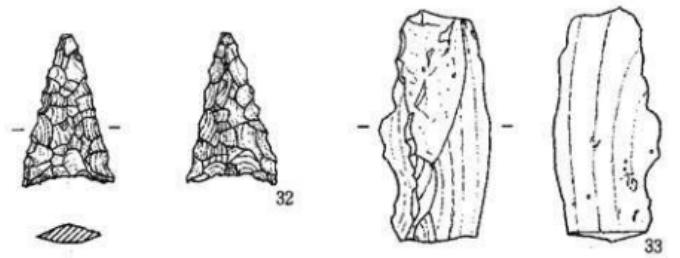


図21. 郡家今城遺跡(89-2) 土製品・鉄製品 挖立柱建物2(43), 挖立柱建物3b(48),  
Pit(42・44~46・48・50),溝1(39・41),  
包含層(49)



0 5 cm

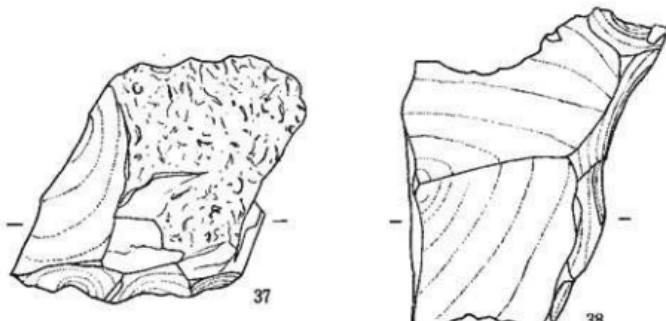
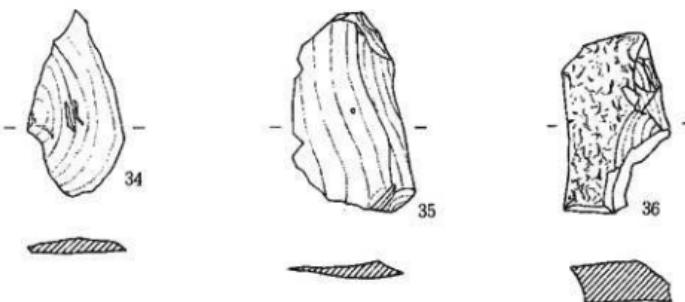


図 22. 郡家今城遺跡(89-2) 石器・剥片

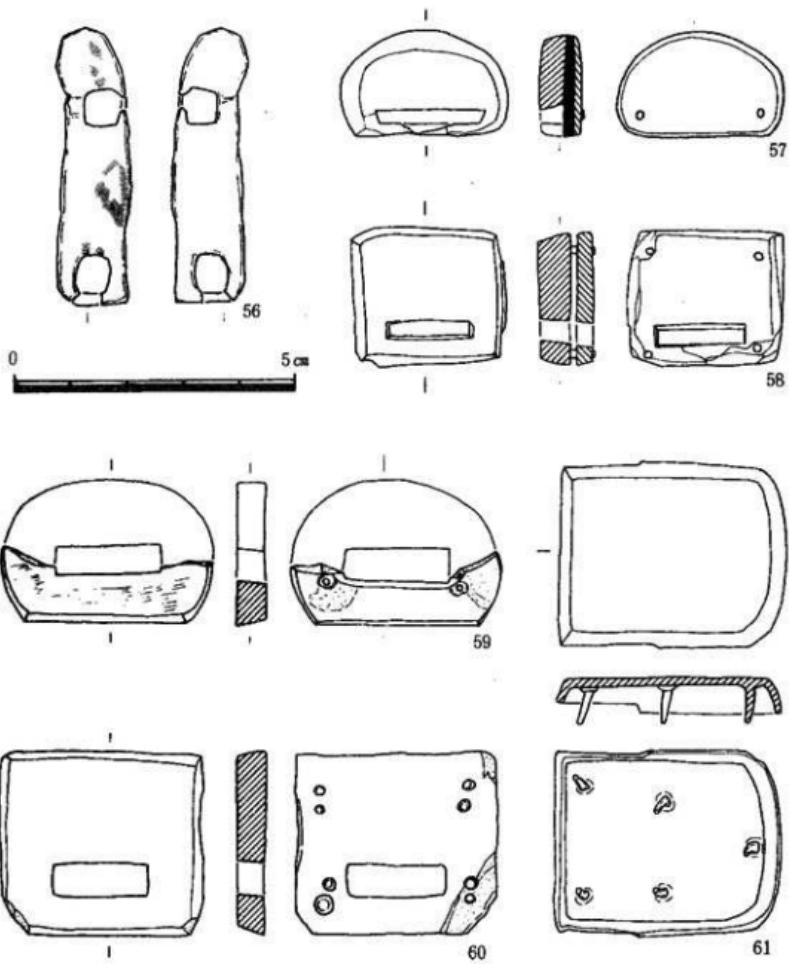


図23. 郡家今城遺跡(89-2)銅製品・鎔帶

山陽道路整地土(56), 側溝1(59), Pit135(58), 70年度調査地D区包含層(61)  
87年度調査地・土壤1(57), 88年度調査地・包含層(60)

## 灰釉・綠釉陶器

量的に少なく、かつ小片である。山陽道整地土や側溝の近辺より出土した。灰釉陶器には壺(20～22)・碗(26)・平瓶(24)・把手(25)がある。碗(23)の釉は暗緑色で刷毛塗りのために薄い。また、輪高台と三日月高台の中間的な形態をし、重ね焼きをすることなどから猿投窯黒笹90号窯式と考えられる。24は平瓶の把手、25は壺の把手である。半円形を呈す両側面に5条の弧線を毛彫りで表わしている。

綠釉陶器は碗(26・27・29～31)と大形品の底部片(28)がある。碗は26を除けばすべて硬質である。高台には26・29のような輪高台と27・30・31のような平高台がある。30の底部外面にはヘラ記号が看取できる。

## 土製品(39～45)

### 土馬

3点出土した。39は上半身の一部である。現存長7cm、厚さ2.3cm、幅は復元すると約5cmとなる。断面の形状はかまぼこ形で腹部分がくぼむ。首・前脚・下半身を欠く。色調は明茶褐色である。40は尻尾の一部で先端を欠いている。現存長4cm、幅は最大で3.1cm厚さ1.8cmを測る。断面の形状は39と同様に下がくぼんだかまぼこ形である。色調は明茶褐色である。41は脚である。現存長7.2cm、断面は丸く直徑は先端で1.3cm、脇側で2.2cmを測る。

この3点は接合こそしないが、胎土や色調そして検出遺構もすべて溝1と一致することから同一個体と考えられる。

### 土鍾

4点出土した。いずれも有孔土鍾である。42は現存長2.8cm、最大径0.9cmを測る。孔径は0.4cmである。色調は暗灰色である。溝1出土。43は全長4.1cm、最大径1cmで孔径は0.5cmである。色調は灰白色である。掘立柱建物2より出土した。44は全長4.8cm、最大径1.1cmを測る。孔径は0.55cmである。色調は赤灰色～明灰色を呈している。ピット91出土。45は全長4.6cm、最大径1.6cmと他の3個と比較して太い。孔径は0.5cmを測る。色調は暗灰褐色を呈している。

## 石器(32～38)

石器・剥片は合計7点出土したが、いずれも柱穴や溝の埋土などからであり原位置を保つものは無かった。32はサヌカイト製の石鎌である。現存長2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測り、先端を欠く。調整は丁寧であることから縄文時代に属すと考えられる。33はナイフ形石器の末製品である。現存長4cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmである。石材はサヌカイ

トであり、風化が進行している。製作途中で破損したようである。34~36は剝片、37・38は翼状剝片石核である。37は搔器として再利用している。

その他に井戸1、溝1などから砥石が数点出土している。

#### 金属製品・その他の遺物（46~61）

56は金銅製品である。全長4.8cm、幅1.2cm、厚さ0.05cmを測る薄い板状を呈している。片側の端部を圭頭状に、もう一方の側を方頭状に仕上げている。一辺0.6cmの方形孔が2ヶ所あり、両者の間隔は2cmである。全体的に腐食が著しく進んでいるものの片側の面には金箔がわずかに残存している。もう一方の側には金箔は無く仕上げも雑なことから表・裏が判断できる。用途は明らかではないが、金装であることから飾具の一部であったと考えられよう。山陽道整地土より出土。

#### 鈎帯

鈎帯は銅製と石製各1点ずつ出土した。巡方(58)は青銅製で縦2.3cm、横2.6cm、表金の厚さ0.6cm、裏金の厚さ0.1cm、全体で1cmを測る。装着は内側にある4本の支脚を裏金の孔にはめこんで固定する方法である。遺存状態は比較的良好ではあるがブロンズ病が進行しつつある。烏油腰帶であるが漆膜は残っていないかった。銅鈎帯A IVタイプの小形品である。昭和62年度に南西隣接地で実施した調査で同タイプの丸柄(57)が出土している。石製丸柄(59)は山陽道側溝1より出土した。上半分は欠落している。現存部分の大きさは縦1.3cm、横3.7cm、厚さ0.5cmを測る。裏面両側に2孔で一対をなす装着用の孔が認められる。石材はサヌキトイドである。石鈎帯b IIタイプに分類される。東方100mで昭和62年度に実施した調査でも大理石製の同タイプの巡方(60)が出土している。なお銅製蛇尾(61)は当調査区南方、昭和45年に実施した調査で出土したものである。参考までに掲載した。

#### 刀子

刀子は2点出土した。46はピット1より2分割した状態で出土した。両者は接合しないが同一個体と考えられる。現存長は8.3cmと4cmで刃先と茎の大部分は欠落している。刃元の身幅は2.1cm、棟厚0.5cmで茎は幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。全体に腐食が著しい。57は腐食が著しく進行している。刃元の身幅は現存部分で約1.7cm、棟厚は0.6cmである。茎は折れ曲がっている。幅1cm、厚さ0.4cmを測る。ピット104より出土した。

#### 鉄釘

48は現存長4.6cmを測る。頭と先端部分は欠落し、右方向へねじれている。断面は1辺0.7cmの方形である。掘立柱建物3bより出土した。49の両端は欠落し現存長は4.7cm

を測る。断面は1辺0.55cmの方形を呈している。50はゆるやかに湾曲した形をし両端は欠いている。現存長は5cmで断面は片側が1辺0.7cmの方形、もう一方の側は0.5×1cmの方形を呈している。腐食が進む鉄製品でその用途は不明である。ピット116より出土した。その他にピット174より鉄片が5点(57~61)出土した。各々は接合しないので全形を知ることはできない。鍛造品である。

## 小 結

今回調査を実施した地点は郡家今城遺跡の縁辺部に近く、隣接地の調査結果からも遺構の密度もさほど高くないと考えられていた。ところが予想以上に多くの遺構を検出することができ、遺存状況も大規模な削平を受けてはいるものの比較的良好であった。以下、主要な遺構の変遷を中心に述べ、まとめとしたい。

山陽道跡は新旧2つの時期が認められた。ここでは仮に古期をI期、新期をII期と呼称する。I期山陽道の検出遺構は側溝3のみであり、これは南側側溝にあたる。I期の下限はII期の側溝2との切り合いで求めることができる。側溝1の掘削時期は、掘削時の整地土中には全く遺物が含まれていないことや整地土の色調や質が地山に類似することから、当時の表土は包含層が形成される前のプライマリーな状態であったとすることができるので郡家今城の集落が形成される以前に求めることができよう。

II期の山陽道もI期と同様に掘削前に整地を行なっている。整地土には土器が多数混在されており、掘削時期の判断材料とする。8世紀代の土器が多いがその中には9世紀代の須恵器・黒色土器・綠釉陶器が含まれている。須恵器には糸切り痕のある平高台の壺があり、須恵器の編年観から9世紀後半頃に比定できる。黒色土器も典型的なA類の碗であり、綠釉陶器も洛西窯系の硬質焼成の碗が出土していることからも9世紀後半頃とみて大過ない。

また、調査区北側に集中する9~10世紀頃のピットはI期の側溝を切るものがある。しかしII期の路面や側溝を切るものは無く、このピットとII期山陽道は併存したと考えられる。側溝出土遺物も9世紀後半や10世紀前半頃の土釜片などがあり少なくとも郡家今城集落が存在する間は併存したといえよう。ゆえにII期山陽道は9世紀後半頃に再整備され、その時に道幅も狭くされたのである。

なお、山陽道跡から南へのびる溝1の出土遺物もII期側溝と同じ傾向が認められるのではば同時期に存在したのであろう。

次に掘立柱建物について考えてみたい。まず検出した15棟のうち重複のないのは掘立柱建物2・8・12・14である。残る11棟についての切り合いをみると次のようになる。

掘立柱建物 7 → 掘立柱建物 6 → 掘立柱建物 1 → 掘立柱建物 4、掘立柱建物 5 → 掘立柱建物 4、掘立柱建物 3a → 掘立柱建物 3b、掘立柱建物 9 → 掘立柱建物 10、掘立柱建物 13 → 掘立柱建物 11。その他に掘立柱建物 2・8 は溝 1 に切られている。

掘立柱建物を同一の軸方向を示すものでまとめると掘立柱建物 7 (N-1°-W)、掘立柱建物 6 (N-0.5°-E)、掘立柱建物 3a・9 (N-3°-E)、掘立柱建物 1・2・3b・10 (N-5.5°-E)、掘立柱建物 11~14 (N-7°-E)、掘立柱建物 8 (N-17°-E)、掘立柱建物 5 (N-7°-W)、掘立柱建物 4 (N-4°-W) の 8 グループに大きく分かれる。同時代の掘立柱建物はほぼ同じ方向性を示すことがわかっているので、この 8 グループはそれぞれの年代を示していると考えられる。そこで出土遺物から建物の時期を検討してみたい。掘立柱建物 1 は掘形より 9 世紀前半頃の黒色土器 A 類碗が出土し、8 世紀末頃の落ちこみ 1 を切っているので 8 世紀末～9 世紀前半頃とすることができる。掘立柱建物 3a は 8 世紀後半、3b は 8 世紀後半～末頃の遺物が出土している。掘立柱建物 4 は黒色土器や糸切りの底部に三日月高台を付した須恵器片が出土しているので 10 世紀前半頃と考えたい。掘立柱建物 6・7 はともに 8 世紀代の土器がわずかに出土するが遺物に関しては決め手を欠く。掘立柱建物 11 からは 9 世紀代の須恵器、掘立柱建物 12 からも同時期の土師器が出土している。掘立柱建物 14 からは 9 世紀前半頃の黒色土器が出土している。以上のことから 8 世紀後半頃に掘立柱建物 3a、8 世紀末～9 世紀前半頃に掘立柱建物 1・3b、9 世紀前半～中頃に掘立柱建物 11～14 が存在したことになる。

これまで述べた掘立柱建物の位置関係・方向性・出土遺物とを総合して遺構の変遷を示したのが図 24 である。この図を見ると屋の建て替えに 2 つの流れがあるのがわかる。つまり掘立柱建物 6 → 1 → 14 → 5 → 4 と掘立柱建物 9 → 10 → 11 である。両者とも調査区隅で検出した建物が多く、その流れを完全に示していないかもしれないが、南北 2 つの屋敷地が存在すると考えたい。特に前者は 8 世紀～10 世紀という律令期に展開する郡家今城遺跡の全期間にわたって一定の範囲内で建て替えながら継続していたのである。しかしその範囲に関しては明確にできなかった。隣接地の調査を待って検討してみたい。

奈良～平安時代の掘立柱建物は各時期ごとに同じ方向性を示し、時代が降るにつれて軸が西から東へ振っていくことがこれまでの調査で明らかにされている。しかしある程度東へ振った後は軸がどのように変化するのかは判然としなかった。今回の調査においても 8 世紀中頃から 9 世紀前半頃にわたって軸方向が漸次東へ振っていく過程が明らかになった。さらに 9 世紀後半頃には東へ振っていた軸が西へ大きく振りもどし、再び東へ振っていくことが判明したのは大きな成果であった。この時期には山陽道が再整備さ

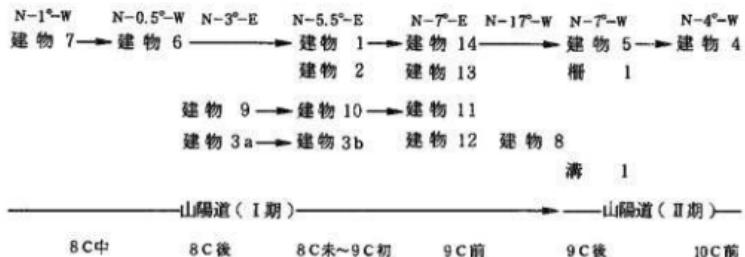


図24. 遺構の変遷

れるなど律令制が崩壊していく中でひとつの画期として把えることができよう。

遺物では鈎帯や刀子など特徴的なものが出土した。これまで墨書き土器や木筒の出土から北東に隣接する鳩上郡衙の官人層の集落であるとされ、今回の出土遺物もそれを強化することになった。鈎帯は本遺跡をはじめ梶原南遺跡・ツゲノ遺跡そして岡本山古墓群で検出している。これらは烏油腰帶・雜石腰帶に相当する。銅鈎帯は6タイプあるうちのAIIIタイプ1例、AIVタイプ3例、AVIタイプ1例と3タイプあり、小形品が多い。石鈎帯は3例ともbIIタイプとなっている。鈎帯はその大小で官位を表現しており、奈良時代の銅鈎帯でみれば郡家今城遺跡にも異なる官位の者が居住していたことになる。その他、金銅製品や銅鏡などの銅製品が遺跡北西部、山陽道沿いで出土するなど同一集落内でも建物規模や所有品などに差異が認められる。現段階では官位と建物の規模などの関係は明らかではない。今後は建物規模や位置関係、官位との関係など律令時代の官人集落を有機的に追求していきたい。

(宮崎)

## 20. 郡家今城遺跡(89-3)の調査

高槻市氷室町一丁目781-31番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南西部に位置し、これまでの調査でもほとんど遺構が検出されていない地域にあたる。調査は届出地の西側中央部に2m角のトレーニングを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.4m)、耕土(0.2m)、床土(0.05m)、暗灰色砂層(0.3m)〔整地層〕、茶灰色土層(0.3m)〔遺物包含層〕、黄褐色粘土層〔地

山]である。今回の調査では、明確な遺構はまったく検出することができなかつたが、昭和48年に東側調査区で検出した東西溝の一部にあたることが土層の堆積状況から推測される。遺物は包含層から奈良時代の須恵器・土師器・製塩土器片が少量出土しているが、いずれも細片であつて復元できるものはない。

(大船)

## 21. 郡家今城遺跡(89-4)の調査

高槻市氷室町一丁目786-28、782-7番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立つて発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南西部に位置し、昭和48年の東側調査区と隣接しない地域にある。調査は届出地の中央部に東西1m南北3mのトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.75m)、耕土(0.2m)、暗黄土色砂質土層(0.3m)〔整地層〕、灰黄色粘質土層〔地山〕である。今回の調査では、径0.2m、深さ0.1mの柱穴2ヶ所を検出することができたが、遺構の分布は全体に希薄である。昭和48年に東側調査区で検出した掘立柱建物群が、さらに西側のこの付近一帯まで広がっていたことが推測される。出土遺物は調査範囲が狭小なこともあって、まったく検出することができなかつた。

(大船)

## 22. 郡家今城遺跡(89-5)の調査

高槻市氷室町一丁目786-28、782-7番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立つて発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南西部に位置し、昭和48年の東側調査区と隣接しない地域にある。調査は届出地の中央部に東西3m南北2mのトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.6m)、耕土(0.2m)、茶灰色砂質土層(0.3m)〔整地層〕、黄土色土層(0.1m)、黄灰色粘土層〔地山〕である。

今回の調査では、幅0.4m、深さ0.4mの南北溝と柱穴1を検出することができたが、遺構の分布は全体に希薄である。昭和48年に東側調査区で検出した掘立柱建物群が、さらに西側のこの付近一帯まで広がっていたことが推測される。今回の調査区からは奈良

時代に属する須恵器・土師器・製塙土器を少量検出することができたが、いずれも細片であって全形を知れるものはなかった。

(大船)

## VI. 郡家本町遺跡



図 25. 郡家本町遺跡の調査位置図

### 23. 郡家本町遺跡（89-1）の調査

高槻市郡家本町1565-4番地に所在し、小字は東上野である。現状は畠である。当該地は標高約30mを測る丘陵上にあたり、100m南で落差約10mの急斜面となって平野部にいたる。また、南西80mには芥川庵寺瓦窯がある。

今回の調査は共同住宅建設が計画されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って実施した。当該地は、瓦窯跡にかかわるなんらかの遺構・遺物を検出する可能性が考えられた。そこで届出地に南北2ヶ所のトレンチを設定した。表

土の除去には重機を使用し、その後人力で地山面まで掘り下げた。

南トレンチは2m×3.5mの規模である。層序は表土(0.1m)、暗茶灰色土(0.1m)、茶褐色礫土〔地山〕である。地山がわずかに落ち込んだ部分には暗褐色礫土が堆積していた。北トレンチは2m×4mの規模である。0.2mの表土・耕作土を除去するとすぐ茶褐色礫土〔地山〕となる。地山の状態がよくないうえ、古くに削平を受けたためか南北両トレンチとも遺構・遺物は検出しなかった。

(宮崎)

## VII. 大藏司遺跡

### 24. 大藏司遺跡（89-1）の調査

大藏司三丁目208番地にあたり、小字名は二黒と称する。現状は宅地である。このたび共同住宅建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、遺構の確認調査を実施した。

調査は、基礎掘削に併行して精査をおこない、層序観察及び遺構の有無を確認することとした。基本層序は盛土(0.4~0.5m)、耕土(0.15~0.2m)、床土(0.05~0.1m)、茶褐色土層(0.3~0.7m)〔遺物包含層〕、地山である。地山面は西北から東南へ傾斜し、西北側約4分の1が灰~黄褐色砂疊層、他は淡灰色砂質粘土層であり、同面の標高は約24.5~23.9mをはかる。

遺物包含層は、散見されるごく小さい土器片からそれと知られる程度のもので、包含層の上面及び下面で精査をおこなったが、遺構はまったく検出されなかった。遺物としては、包含層から土器片が少量出土している。いずれも風化摩滅した小片で古墳~奈良時代に属すると考えられるものである。  
(鐘ヶ江)

### 25. 大藏司遺跡（89-2）の調査

高槻市大藏司三丁目205-14番地にあたり、小字名は二黒と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の中央部北側に位置し、遺構の分布が希薄な地域にあたる。調査は届出地の中央部に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.75m)、耕土(0.15m)、床土(0.2m)、暗灰~褐色土層(0.2m)、暗褐色土層(0.1m)、暗黃褐色土層(0.9m)、暗黃褐色疊層〔地山〕である。今回の調査では、調査範囲が狭小なこともあって遺構・遺物はまったく検出することができなかった。ま



図26. 大藏司遺跡の調査位置図

た地山面などの堆積状況からも推測して、遺構の分布は全体に希薄な地域であることが考えられる。

(大船)

## 26. 大藏司遺跡（89-3）の調査

高槻市大藏司三丁目205-10番地にあたり、小字名は二黒と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の中央部北側に位置し、遺構の分布が希薄な地域にあたる。調査は届出地の中央部に2m角のトレーナーを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.6m)、耕土(0.15m)、床土(0.4m)、暗褐色土層(0.05m)、黄茶褐色土層(0.9m)〔遺物包含層〕、暗灰色礫層〔地山〕である。今回の調査では、調査範囲が狭小なこともあって遺構・遺物はまったく検出することができなかった。

(大船)

## 27. 大藏司遺跡（89-4）の調査

調査地は高槻市大藏司三丁目123-1、小字名は神明である。今回住宅建設工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため事前に調査を実施した。

当該地は大藏司遺跡の南西辺に位置し、北東隣では弥生時代後期から奈良時代までの遺構が検出されており（「36. 大藏司遺跡」『昭和53、54、55年度高槻市文化財年報』）、本調査においても同様の遺構の検出が期待された。

調査は届出地の北半部に東西11m、南北8mの調査区を設定しておこなった。層序は、盛土(1.0m)、旧耕上(0.1~0.05m)、茶褐色粘質土〔床土〕(0.1m)、灰色砂礫(0.2m)、暗灰色砂礫(0.5m以上)で、北東隣でみられたようなしっかりした地山は当該地ではみとめられず、床土直下は非常に不安定な一連の砂礫であった。これはおそらく、現在は西に流れる芥川の旧河道による堆積によるものと考えられる。

このような状況のため、遺構は何ら発見することができなかった。遺物としては、これら砂礫層中から、弥生土器片、土師器片、須恵器片、円筒埴輪片等ごく少量が出土した。いずれも器壁が荒れており、河道上流から運ばれてきたものであろう。

これまでの調査で大藏司遺跡の西限は南北に縱貫する府道あたりと考えられてきたが、今回の調査の旧河道の発見によりその推定をほぼ裏づけることとなり、また北東隣の各期の集落は当該地までおよんでいないことが明らかとなった。

(高橋)

## VIII. 芥川遺跡

### 28. 芥川遺跡の調査

殿町70-1番地にあたり、小字名は殿ノ内と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅新築の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査地は芥川と平行して南流する真如寺川のすぐ東側にあたり、東南約50m地点で中世の溝・柱穴群を検出している。調査は、届出地の中央に一辺3mの調査坑を設定し、人力で掘削して遺構を精査した。基本層序は、表土(0.08m)、黒褐色土層(0.15m)〔整地層〕、茶褐色礫土層(0.2m)〔整地層〕、暗褐色土層(0.01m)〔包含層〕、暗黃灰色土層〔地山〕である。地山面の標高は約15.2mをはかる。

遺構は、明治期まで存続したと考えられる土坑・溝のほかは検出しなかった。包含層は削平のため部分的に認められたのみであるが、ごく少量出土した土師皿片から中世に属するものと判断された。したがって、今回の調査では遺構の検出には至らなかったものの、当該地まで中世集落がひろがっていることが考えられる。  
(籠ヶ江)



図27. 芥川遺跡の調査位置図

## IX. 高櫻城跡

### 29. 高櫻城跡(89-1)の調査

調査地は高櫻市野見町1251-18番地に位置し、現状は宅地である。このたび、住宅新築工事を計画するにあたり、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。小字名は衆路山と称し、高櫻城出丸跡の外堀にあたる。

届出地は東西に長いため3ヶ所のトレンチ(第1~第3トレンチ)を設定し、西側に

位置する第1トレンチより調査を開始した。



図28. 高槻城跡の調査位置図(1)

第1トレンチは $1.2m \times 2.4m$ の規模である。1.8mの深さまで掘削したが、壁面の崩壊が激しいためにそれ以上掘り下げることはできなかった。層序は盛土(1m)、緑灰色粘土(0.1m)、暗灰色粘土(0.6m)、淡青灰色粘土(0.3m)であった。

第2トレンチは $1.2m \times 2.6m$ の規模である。層序は盛土(0.4m)、淡緑灰色粘土〔整地土〕(1m)、緑灰色粘土(0.6m)、暗緑灰色粘土(0.6m以上)である。2.6mの深さまで掘削し、かろうじて外堀の堆積土まで達したが、地山まで至らなかった。

第3トレンチは最も東側に位置し、 $1.1m \times 2m$ の規模である。層序は盛土(0.2m)、黄灰色土(0.8m)、暗灰色粘土(1.2m)、淡緑灰色粘土であり、以下は崩壊の危険があるために掘削できなかった。

今回の調査では出丸の外堀跡を確認したのみであり、堀の深さや幅等は明らかにできなかった。また、遺物もまったく出土しなかった。

(宮崎)

### 30. 高槻城跡(89-2)の調査

高槻市城内町1002-13番地にあたり、小字名は練兵場と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の外堀南側中央部に位置しているが、すでに堀は埋め立てが完了し外側道路より高く土盛りされた造成地である。調査は届出地の北東部に東西2m南北2mのトレンチを設け、堀の埋



図29. 高槻城跡の調査位置図(2)

浸状況の観察をおこなった。層序は盛土(0.8m)、耕土(0.15m)、床土(0.2m)、暗灰色粘土層(1.3m)、黒灰色粘土層(0.4m以上)で、小型ユンボではこれ以上深く調査することが困難であった。今回の調査では、調査範囲が堀の中央部ということもあって堀岸からの明確な堆積を確認することができなかったが、黒灰色粘土層が江戸時代の堀底に堆積したものであることが埋め土の層序などから推測することができる。出土遺物はまったく認められなかった。

(大船)

### 31. 高櫻城跡（89-3）の調査

高櫻市城内町1015-7・8番地にあたり、小字名は三之丸と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の外堀南側中央部に位置しているが、すでに堀は埋め立てられ外側道路面とほぼ同じ高さまで造成工事が完了している地域である。調査は届出地の中央部に東西2m南北4mのトレンチを設け、堀の堆積状況の観察をおこなった。層序は盛土(0.8m)、耕土(0.15m)、床土(0.2m)、暗灰色粘土層(1.3m)、黒灰色粘土層(0.4m以上)で、小型ユンボではこれ以上深く調査することが困難であった。

今回の調査では、調査範囲が堀の中央部ということもあって堀岸からの明確な堆積を確認することができなかったが、黒灰色粘土層が明治の廢城までに堀底に堆積したものであることが層序観察などから推測することができた。

(大船)

### 32. 高櫻城跡（89-4）の調査

高櫻市城内町1015-11番地に所在し、現状は宅地である。小字は三之丸と称し、高櫻城三ノ丸を巡る外堀内に位置している。

今回住宅建築が計画されたため、文化庁・府教委等関係者等とも協議のうえ工事に先立って発掘調査を実施した。届出地内に1m×2mのトレンチを設定し、掘削には重機を使用した。層序は黄褐色土(1m)、黒灰色土(0.4m)、暗灰色粘土(0.2m)、緑灰色粘土(0.4m)、青灰色粘土(0.3m以上)である。湧水が激しいために外壁が崩壊する危険が生じたので掘削は中止した。黄褐色土は現代の盛土、黒灰色土・暗灰色粘土は外堀埋め戻し時の整地層でそれ以下は外堀堆積層である。遺物は陶磁器や土製人形などがわずかに出土したのみである。

今回の調査では、トレンチが狭長であったため堀底の確認や北側肩の検出はできなかっ

た。断面を見る限りでは外堀の北側肩はもっと北に位置するようである。 (宮崎)

## X. 安満遺跡



図30. 安満遺跡の調査位置図

### 33. 安満遺跡（89-1）の調査

高槻市八丁畷町154-21番地にあたり、小字名は梨子ヶ本と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西端に位置し、遺構の分布が希薄な地域である。調査は届出地の中央部に東西2m南北2mのトレーナーを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.8m)、耕土(0.15m)、

床土(0.2m)、黄土色粘土層(0.15m)、暗灰色粘土層(0.15m)、青灰色礫層〔地山〕である。今回の調査では、調査範囲が狭小なことによって遺構・遺物をまったく確認することができなかった。

(大船)

### 34. 安満遺跡（89-2）の調査

高槻市八丁畷町154-20番地にあたり、小字名は梨子ヶ本と称する。現状や宅地である。このたび個人住宅の新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西端に位置し、遺構の分布が希薄な地域である。調査は届出地の中央部に東西1m南北2mのトレーナーを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.9m)、耕土(0.1m)、床土(0.2m)、黄土色粘土層(0.3m)、暗灰色粘土層(0.3m)、青灰色礫層〔地山〕である。今回の調査では、調査範囲が狭小なこともあって遺構・遺物をまったく確認することができなかった。

(大船)

## XI. 天川遺跡

### 35. 天川遺跡(89-1)の調査

天川遺跡は辻子一丁目を南流する北大冠水路付近を中心に約200mにひろがる歴史時代の遺跡である。しかしその実態はあきらかではなく、過去にも本格的な調査は行われていない。今回の調査地は高槻市辻子一丁目287-2番地に位置し、現状は畠地である。小字は北中寺である。

調査は畠地造成工事が計画されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。届出地内に3ヶ所のトレンチを設定し、人力で地山面まで掘削して遺構・遺物の検出に努めた。

#### 遺構・遺物

第1トレンチは最も南側に設定した。規模は $2.5\text{m} \times 4\text{m}$ である。層序は耕作土(0.2m)、床土(0.1m)、灰褐色土(0.3m)、暗灰色土(0.1m)、黄褐色砂質粘土〔地山〕である。床土以下は整地土である。遺構は検出しなかった。

第2トレンチは第1トレンチの北側に位置し、 $2\text{m} \times 3\text{m}$ の規模である。層序は耕作土(0.2m)、茶褐色土(0.5m)、灰褐色土(0.2m)、黄褐色粘土〔地山〕である。遺構は検出しなかった。

第3トレンチは最も北側に位置し、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の規模である。層序は耕作土(0.2m)、暗茶褐色土(0.5m)、灰褐色土(0.2m)、黄褐色粘土〔地山〕である。検出した遺構は近世～近代の水路跡のみである。

これらのトレンチはすべて耕作地から地山まで厚く整地されている。各トレンチからは若干量の瓦器・土師器を検出しているが、これらはすべて客土中に混入したものである。地形等からみて遺跡の中心は本調査区より南側に広がっていると考えられる。



図31. 天川遺跡の調査位置図

(宮崎)

### III. 梶原寺跡



図32. 梶原寺跡の調査位置図

ンチの北東及び南西隅で浅い落ちこみを検出したほかには明確な遺構を検出することはできなかった。遺物としては包含層より出土した白鳳～奈良時代の平瓦や12～13世紀頃の土師器・瓦器のほか、盛土・整地土より近世陶磁器や寛永銭が出土したのみである。

(宮崎)

### 37. 梶原寺跡（89-2）の調査

調査地は高槻市梶原一丁目392-5番地に位置し、現状は宅地である。小字は大門と称し、西国街道に面している。今回の調査は個人住宅の建て替えが計画されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。届出地に1m四方のトレシを設定し、人力で地山面まで掘削して遺構・遺物の検出作業を行った。層序は盛土(0.25m)、暗灰色土(0.05m)、暗黃灰色礫土(0.25m)、暗黃灰色砂礫(0.2m)、茶褐色砂礫(0.05m)、青灰色砂質粘土〔地山〕である。小字が「大門」という寺院跡との関連を考えられる場所であるにもかかわらず、遺構・遺物はまったく検出できなかった。

(宮崎)

### こうない III. 神内遺跡

#### 38. 神内遺跡の調査

調査地は高槻市の東端、上牧北駅前町101-3番地他にあたり、小字名は閑間跡と称する。現状は水田だが、今回畠地造成工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って、発掘調査を実施した。

当該地は西の神内山、東の淀川にはさまれた最も狭い平野部の山裾、西国街道と並行して走るJR東海道線の東側に位置する。

これまで、この周辺の遺跡についてはほと

んど知られていない。しかし、この地が山陽道と大原駅に関して重要な意味をもつこと、また神内の地名の由来とされる「神奈備の森」推定地がすぐ南に接すること（いずれも後述）から、この周辺に何らかの遺構の存在が考えられた。

このような状況をふまえて調査は、遺構の確認はもとより、主に層序の把握を目的としておこなった。そのため幅1mでまず一定の深さまで掘り下げ、層序の変化がある部分について各々さらに掘り下げた。結果として7つの調査区（A～G区）を設けたことになる。

基本的な層序は、耕土・床土(0.4m)、淡灰色粘土(0.2~0.5m)、暗青褐色粘質土ないし暗灰褐色粘質土(0.4~0.6m)、暗青灰色粘(質)土ないし黄褐色粘土(0.2m)で淡青灰色微砂(質)に達する。この淡青灰色微砂は非常に安定しているので、地山と考えられる。地山面の標高は6m前後である。

#### 遺構・遺物（図版第19・図33・34）

調査の結果、柱穴等の明確な遺構は確認できなかった。しかしB区において黒灰色粘土が堆積する落ち込みを検出した。この落ち込みは、南・北のたちあがりをともに溝や近世水路によって壊されているが、床土下の淡灰色粘土を切り込むように落ち込んでいる。最深部で0.9m、長さはB区からC・D・E・F区にまでおよび、総長48mありとなる。埋土は黒灰色粘土で、下層にいくにしたがい黒色度が増し、粘性も強まる。この黒



図33. 神内遺跡の調査位置図

灰色粘土から須恵器・土師器の細片がわずかに出土しているが、注目すべきは、E区から出土した滑石製鍋である。口縁部を欠くが、鉢と鉢下約1cmが残る。口径約20cmに復元でき、鉢上面は0.8cm、下面是1.3cm、端部は丸く仕上げる。外面には横方向の細い擦痕が残るが表面は滑らかである。光沢があり、暗灰色を呈する。煤の付着はみられない。内面は不定方向の非常に細い擦痕があり、きわめて滑らかである。光沢があり、淡灰色である。

その他遺構としては、B区で近代の溝、F区でこれも近世の水路や溝が検出された。遺物もこれら新しい時代の遺構と、耕土・床土から陶磁器類の細片が出土している。

### 小 結

今回の調査では、山陽道及び大原駅関連のあるいは「神奈備の森」推定地に関する明確な遺構を認めることができなかった。しかし長さ48mにもわたる落ち込みを検出することができた。その性格は今のところ不明といわざるをえないが、一応もともとの谷地形に泥土が堆積したものと考えておこう。そして、この埋土中から少量ながら、滑石製鍋をはじめとした遺物が出土していることから、周辺に何らかの遺跡の存在が推測できる。滑石製鍋は平安後期から鎌倉時代にかけて製作使用された日用の炊事用具で、北九州を中心広く西日本に分布する。この滑石製鍋の年代が、落ち込み埋没年代の一応の目安となる。

ところで、山陽道と大原駅、そして「神奈備の森」について簡単にふれておきたい。山陽道はほぼ西国街道に踏襲されているが、淀川渡河地点や各駅の場所等現在では不明部分も多い。大原駅もその一つであるが、『続日本紀』和銅四(711)年正月丁未条によれば、大原駅は河内国交野郡楠葉駅の次に記されている。その推定地は現在の枚方市楠葉と淀川をはさんで対岸の島本町桜井とする説がある。しかし、山陽道が官道であるという性格と考慮すれば、楠葉からやや北に迂回する桜井の地とするよりも、西方に直進する道程を想定する方が妥当と思われる。楠葉の西方の対岸はこの神内周辺にあたり、また平野部が狭いため最短のコース設定できるという利点もある。大原駅の有力な推定

地として神内周辺を挙げることができよう。

次に神内という地名のもととなったとされる「神奈備の森」についてである。近世初期の西国街道絵図には、街道をはさんで西に山、東に森が描かれている。

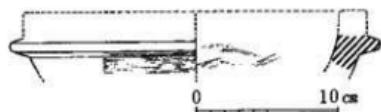


図35. 神内遺跡E区出土 滑石製鍋実測図

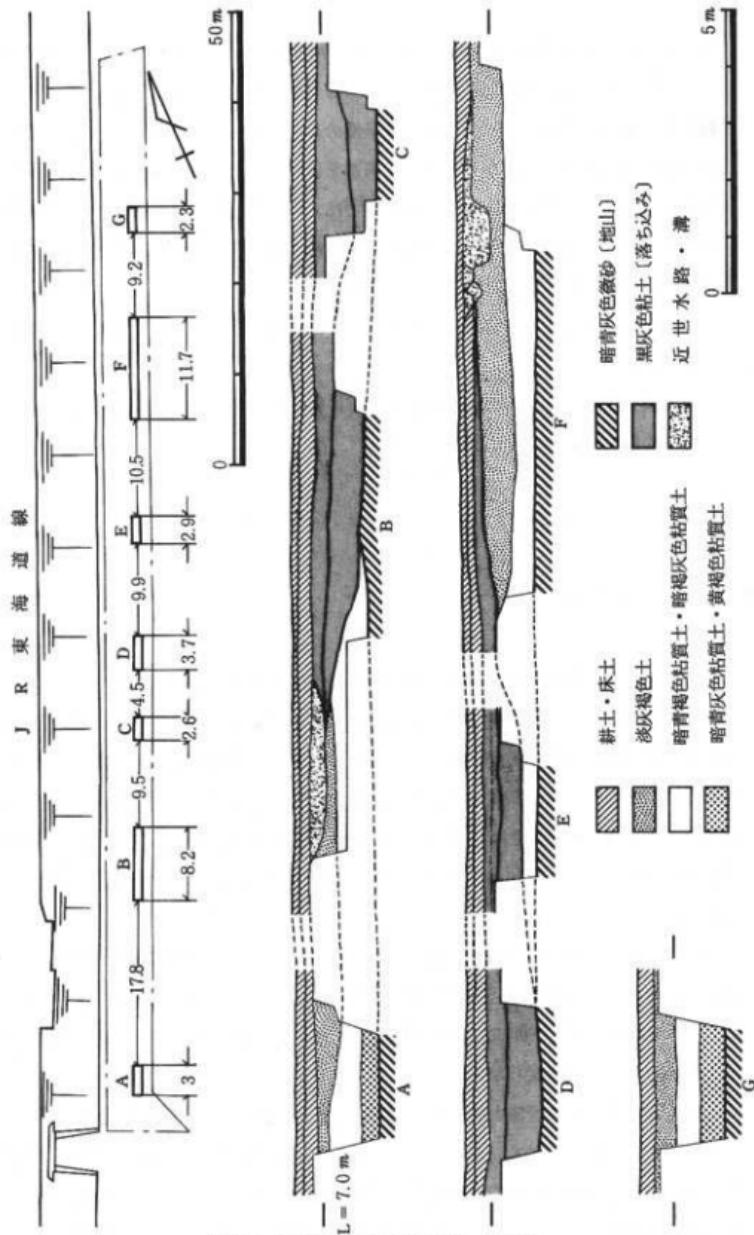


図34. 神内遺跡 調査区配置図・土層図

また『古今集』巻第八離別歌には「山さきより神なびのもりまでをくりに人々まかりて、かへりがへりにしてわかれおしみけるによめる（以下略）。」とみえ、京から西国に下る公卿たちが家族に別れを告げるのが「神奈備の森」であったことがわかる。すなわち、「神奈備の森」とは、山崎よりも西で、街道をはさんで西に山をあおぐ地にある森と考えられる。現在のこすもす公園は数年前までは木々が繁った森であり、すぐ西には榎を伏せたような神内山をのぞむ。この地が「神奈備の森」か否かは不明であるが、神内周辺地域にもとめられることは間違いないであろう。

このようにみてくると、当該地は古代から中世を経て近世にいたるまで交通の要衝であったことがわかる。

今回の調査では、それらの遺構の存在の可能性を示し得た点で意義が大きいと思われる。今後の周辺地域の調査が期待される。

（高橋）

#### XIV. まとめ

今年度は島上郡衙跡で12件、その周辺地域で26件の発掘調査を実施した。

島上郡衙跡は個人住宅の建て替えや道路・水路等の整備事業に伴う小規模な発掘調査が多く、この傾向は数年来続いている。また、調査地も郡衙中心域からはずれた場所が多くなり、郡衙やそれに関連する遺構・遺物などを検出することはできなかった。北西部に位置する12-N地区では自然流路より弥生土器や木製品が出土し、これまで遺構・遺物がほとんど知られない郡衙北西部において新たな集落が存在する可能性を示すことになった。

17-C・G地区では狭小な調査面積にもかかわらず、弥生時代後期の住居跡や中世の柱穴、完形の土器の検出など密度の濃いものとなっている。周辺は弥生～中世の遺構が密集する地城であり、郡衙成立前の状況を把握するうえで重要である。なお一層の調査・研究を進めていかねばならない。

富田遺跡では近世の遺構を検出した。富田は蓮如が建てた富田道場（教行寺）を中心とし、寺内町として栄えた町である。しかし天文元年（1532）12月に一向衆討伐軍の焼き討ちにあり、富田道場や信徒の家は残らず焼き払われたという。今回の調査で出土した備前大甕は16世紀代のものであり、他に炭や焼土等を検出するなど、富田寺内町に関する

手がかりを得たといえる。近年、近世遺跡の発掘が注目されるようになってきており、富田遺跡の重要性もいっそう増してくるだろう。

神内遺跡では、平安時代歌枕にもなった「神奈備の森」に関連する遺構・遺物の検出が期待された。神内の地は北摂山地と淀川にはさまれた狭い平野にあり、室町時代には関所が置かれていた。また、奈良時代には駅制が施され、嶋上郡に大原駅が置かれた。大原駅の比定地には島本町桜井をはじめとして諸説があり、そのひとつに神内周辺があげられている。このように神内は古くから交通の要衝として重要な位置にある。残念ながら今回の調査では神奈備の森や大原駅などに関する遺構・遺物は検出できなかったが、中世の遺物を検出したことによって未発見の集落を想定することができた。神内地区はこれまで考古学的な歴史の空白地帯であったが、今回の調査は高槻市東部の歴史を解明するうえでその端緒となったといえる。

郡家今城遺跡では山陽道跡を検出した。山陽道を引き継いだと言われる西国街道は府立三島高校北西で北側に大きく迂回しており、これは郡家今城の集落の存在に起因するとされてきた。そのため山陽道跡を検出するために西国街道近辺の調査を積み重ねてきたが、これまで成果をあげることはできなかった。ところが今回89-2地区で山陽道を検出し、これまでの説を否定することになったのである。

郡家今城遺跡北辺部では1987・88年に実施した調査で、地形や地割り方向とは異なった北東～南西方向へ延びる溝を数条検出していた。しかし、この溝は削平のために途切れるなどしていたので道路跡と認識するには至らなかった。今年度の調査でも同じ方向にのびる溝を検出し、この溝は約5mの間隔を保って平行に延び、時期や規模が一致することや延長線上に位置することから一連の遺構と考えた。さらには嶋上郡衙跡で検出した山陽道跡と一直線に続くことが判明し、初めてこの溝が山陽道の側溝であることが解明されたのである。

高槻市では嶋上郡衙跡・郡家今城遺跡において今回も含めて山陽道は11例検出している。これを地図上に落として結ぶと一直線に結ぶことができる(図36)。また、磁北からの振れは約N-78°-Eを示し、現在残る条里の東西線(N-84°-E)とは一致しない。しかし芥川廃寺跡周辺に残る現条里とは異なる地割りや嶋上郡衙跡北側で検出する白鳳時代の掘立柱建物の軸方向に一致もしくは近似値を得ている。これは一定の基準に沿って計画されたものと考えられ、少なくとも芥川西岸ではその基準が存在したことになる。

三島地域における条里は8世紀後半頃に施行されたと考えられており、それ以前は条里とは異なる地割りが存在したと推定される。おそらく自然地形が要因と考えられ、

遺跡名(地区)	検出遺構	道幅	調査年
鳴上郡衙跡(65-B・F)	側溝・石敷	9+2.5m, 6m	1970
" (57-F)	石敷	...	1970
" (57-G)	石敷	...	1970
" (65-C)	側溝・石敷	10m, 5~6m	1976
" (55-L・P)	側溝	...	1977
郡家今城遺跡(86R)	側溝	...	1986
" (G12-28)	側溝	約10cm	1987
" (G12-27)	側溝	...	1987
" (G13-35)	側溝	5~6m	1988
" (G13-37)	側溝	...	1988
" (89-2)	側溝	10m以上, 5~6m	1989

表1 高槻市検出の山陽道跡

郡衙北方城で検出する7世紀代の建物はほぼ地形に沿うように磁北より西へ振っている。山陽道もこの方向に沿って計画・施行されたのであろう。また55-L・P地区では古墳を破壊までして造成するなど直線的に延ばす事を志向したことからすれば芥川東岸においても同様の事が指摘でき、山陽道は一定の地割りに沿って三島平野を一直線に貫通していたと考えられよう。その施工時期はこれまでの経過から7世紀後半~8世紀初頭とすることが可能である。

発掘調査の結果、山陽道は少なくとも1度は大規模な整備を受けていることが判明している。その時期は9世紀後半頃であり、その際道幅を10~13mから5~6mへとその規模は縮小している。現段階ではその理由は明らかではないものの、海路(淀川水運)の発達による陸上交通の重要性の低下や律令制の衰退などの経済的・政治的な事が考えられる。また、9世紀の整備後には溝さらえなどの維持・整備作業が行われた形跡はなく、平安時代後期の律令制崩壊期には郡家今城遺跡も消滅し、山陽道も側溝が埋没するなどして荒れていったのであろう。

(宮崎)

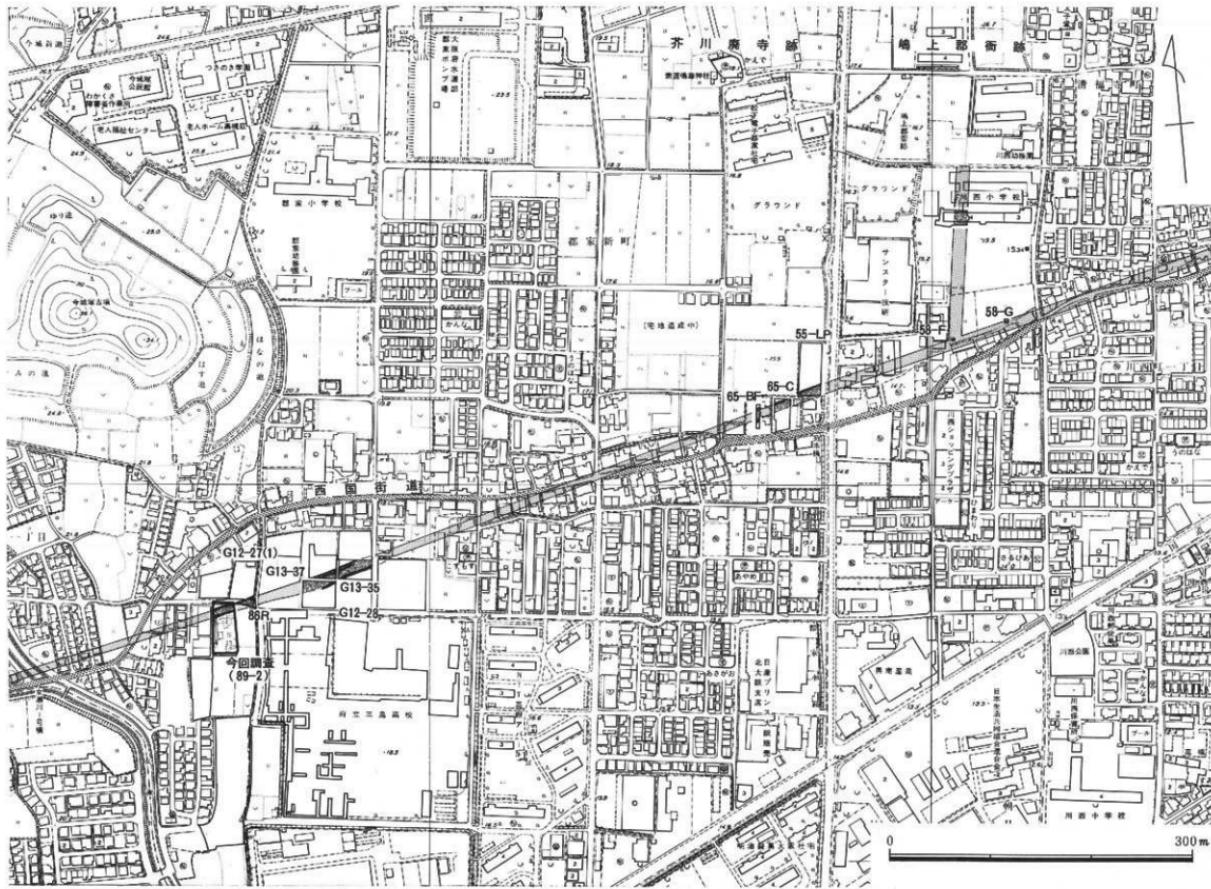
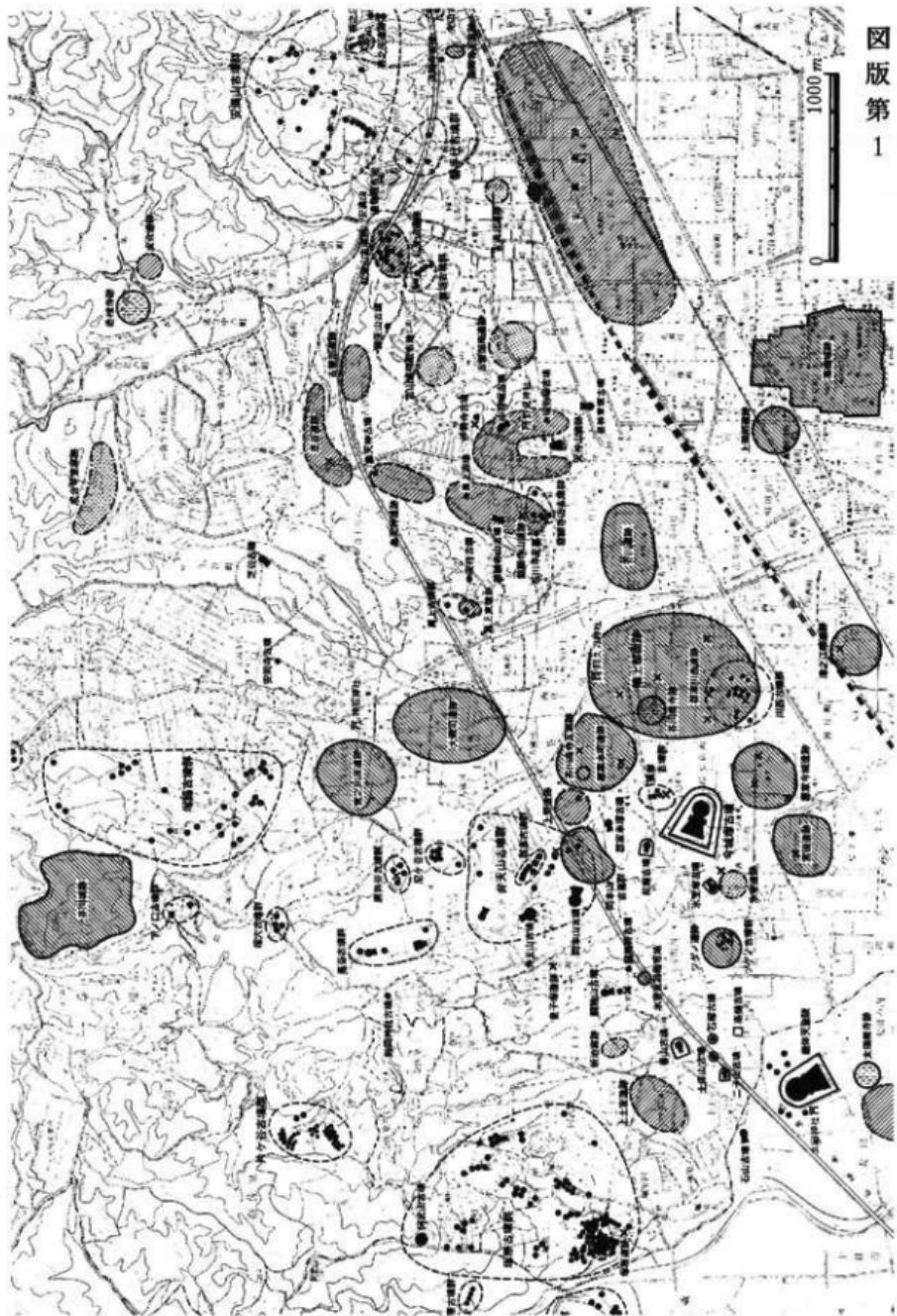


図 36. 山陽道の復元

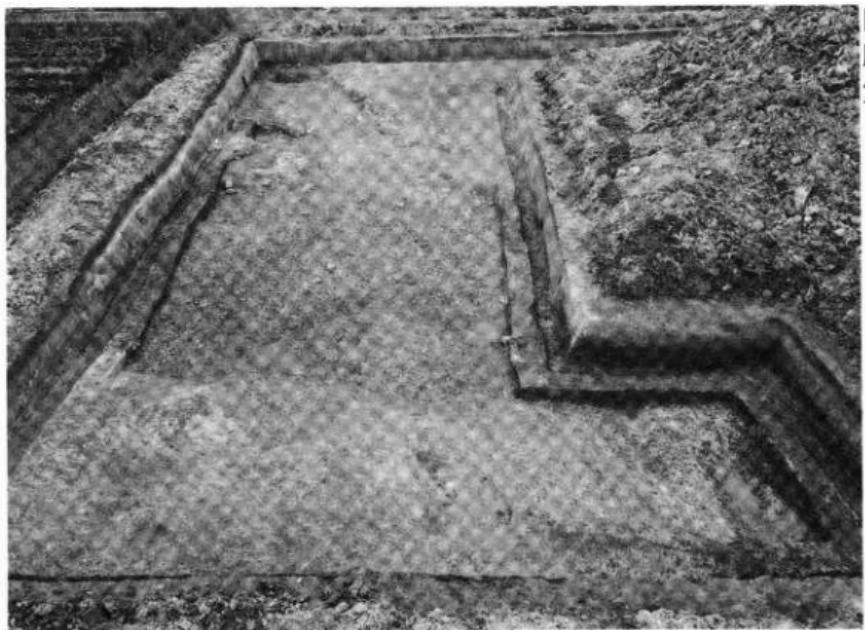
# 図 版



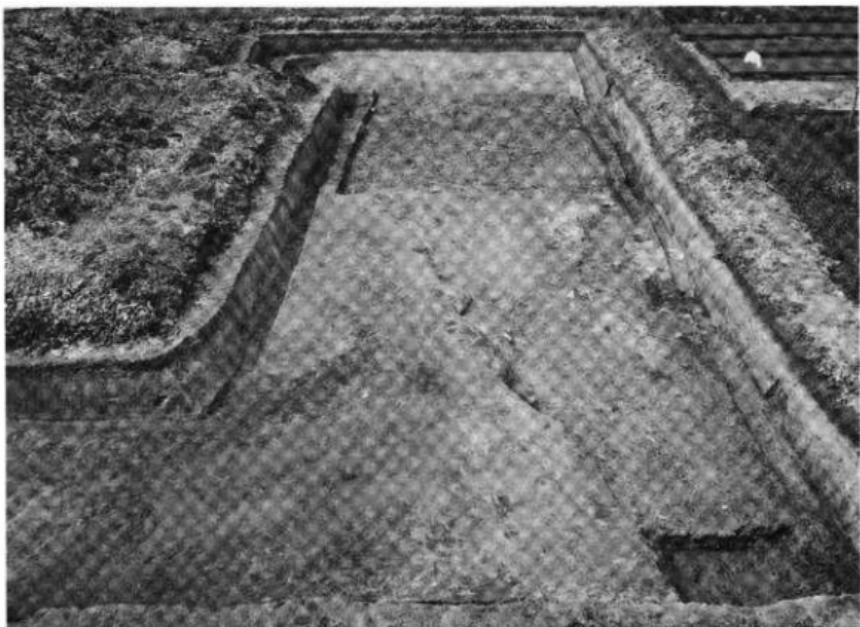
図版第1



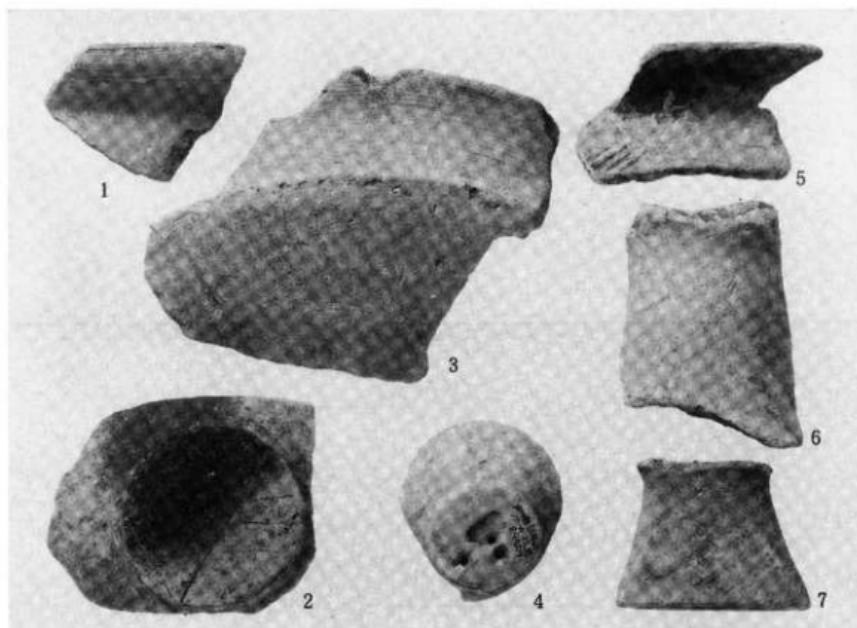
嶋上郡衙跡とその周辺



a. 12-N 地区 全景（北側から）

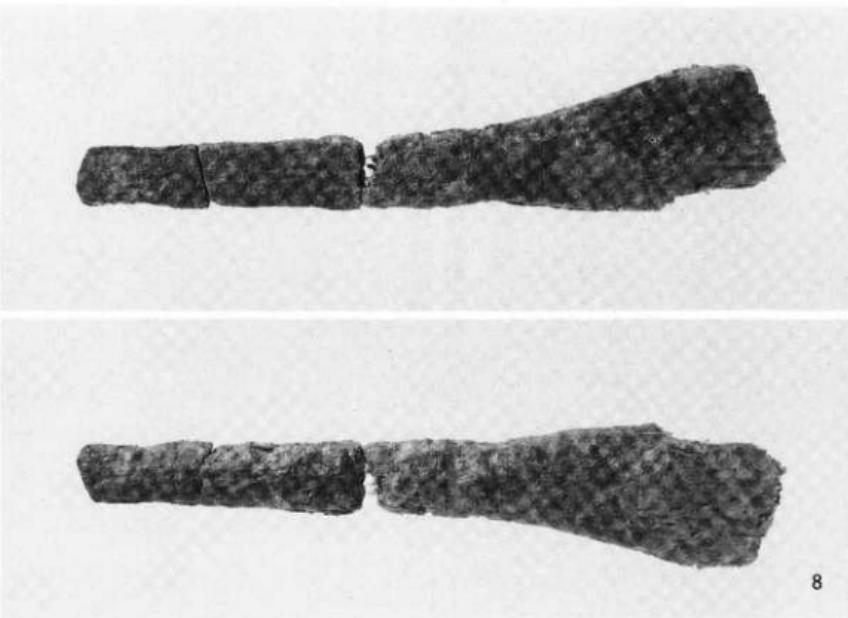


b. 12-N 地区 全景（南側から）



a. 12-N 地区 弥生土器 自然流路 (1~8)

約  $\frac{1}{2}$

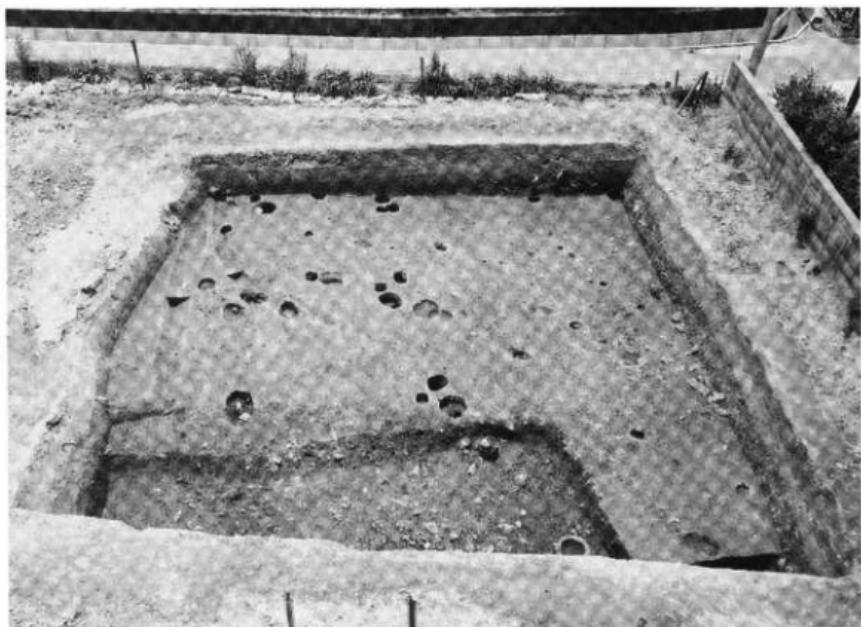


b. 12-N 地区 木製品 自然流路 I (8)

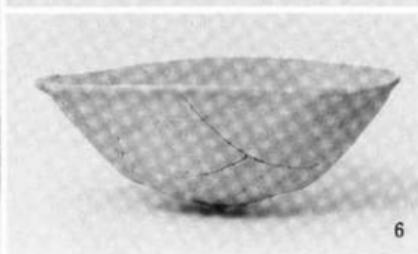
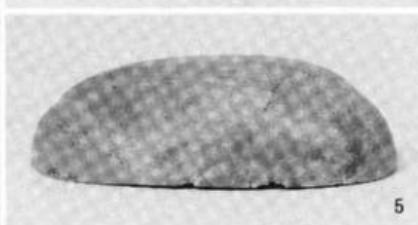
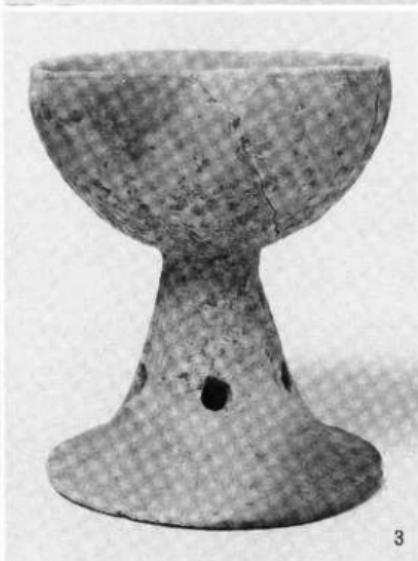
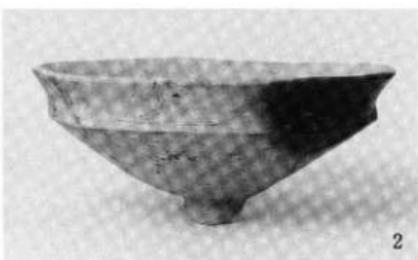
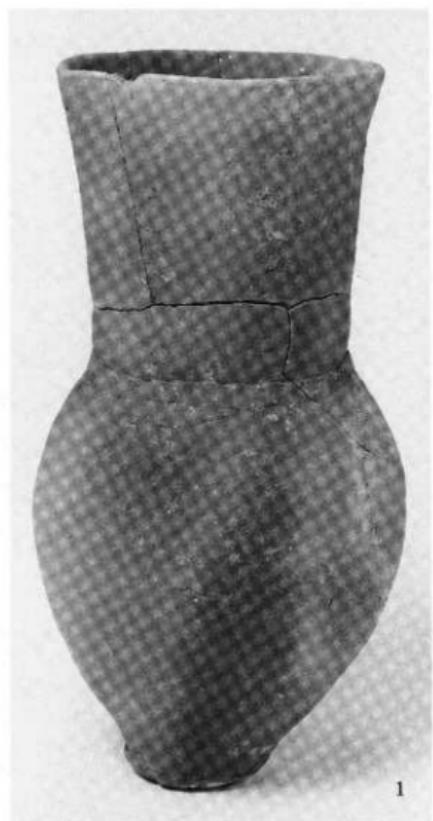
約  $\frac{1}{2}$



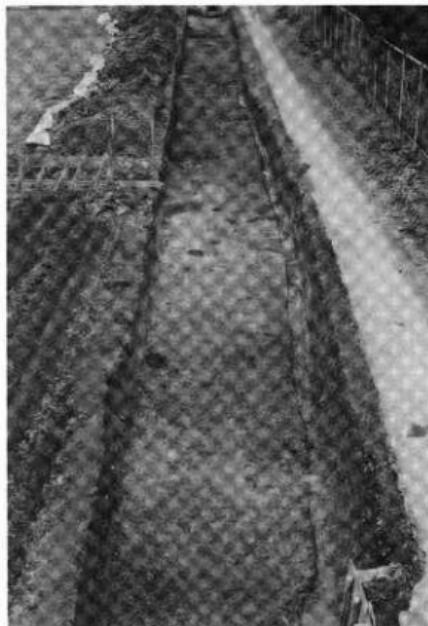
a. 17-C・G 地区 西側調査区（東側から）



b. 17-C・G 地区 西側調査区（北側から）



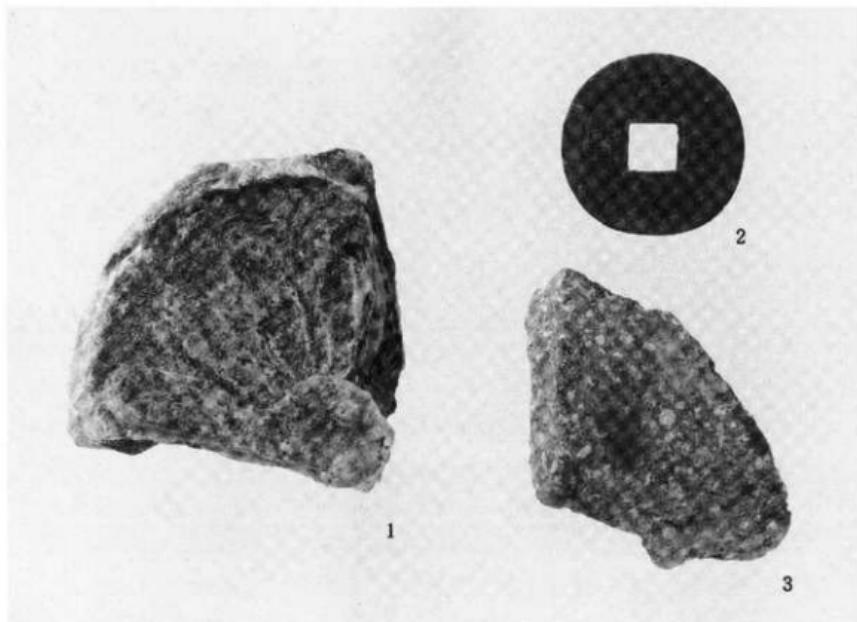
17-C·G 地區 土坑 2 (1~3), 壓穴式住居跡 (4), 包含層 (5·6)



a. 45-A・E 地区 全景(南側から)

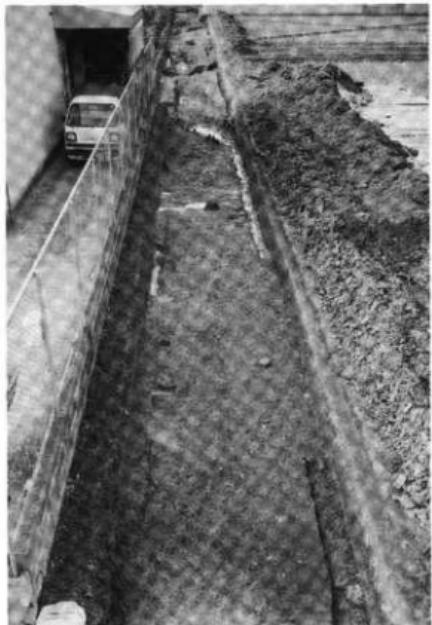


b. 45-A・E 地区全景(北側から)



c. 45-A・E 地区 包含層(1・3), 近世水路(2)

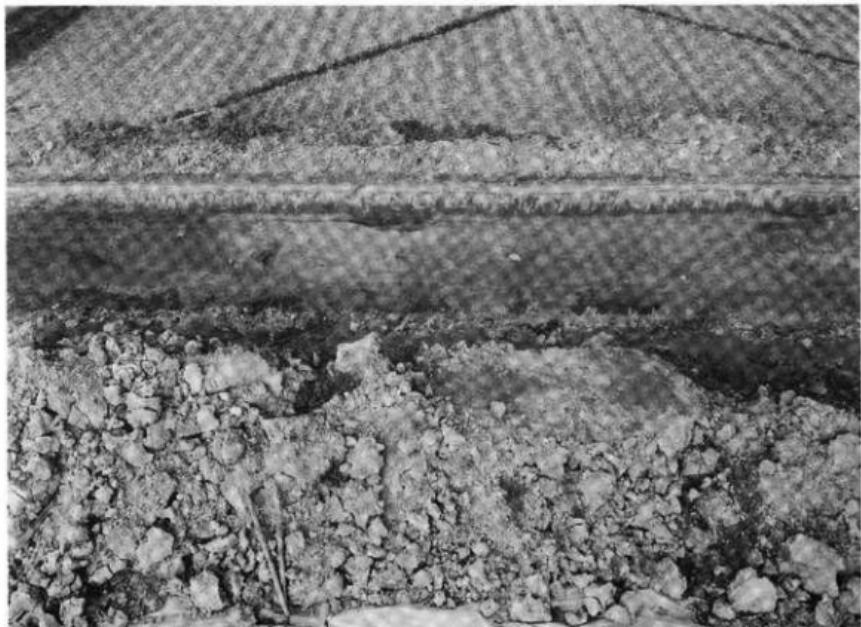
約  $\frac{1}{1}$



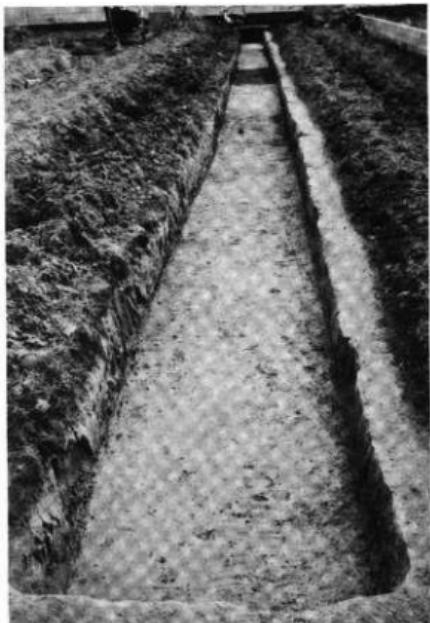
a. 55-J・K・L 地区全景（東側から）



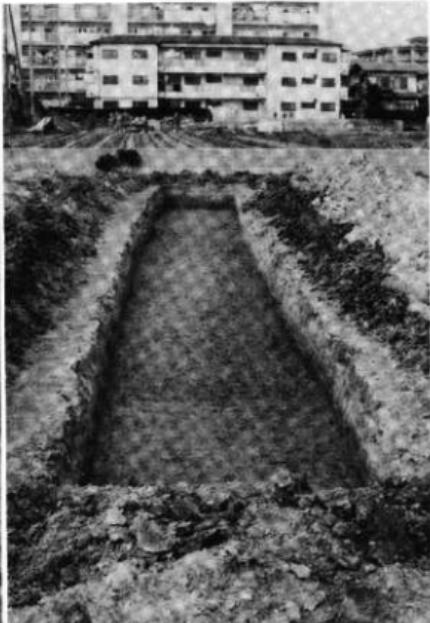
b. 55-J・K・L 地区全景（西側から）



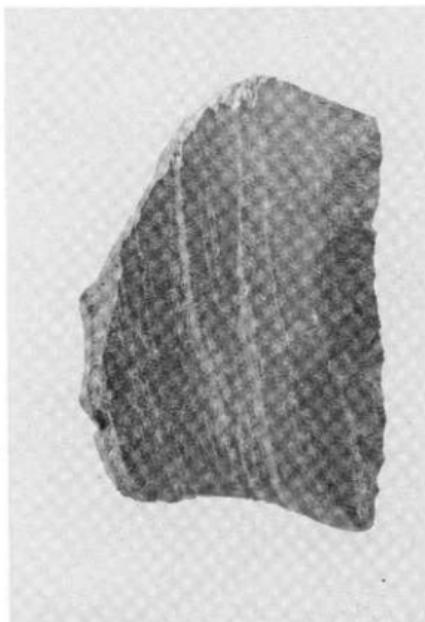
c. 55-J・K・L 地区 溝 1(右)・溝 2(左) 南側から)



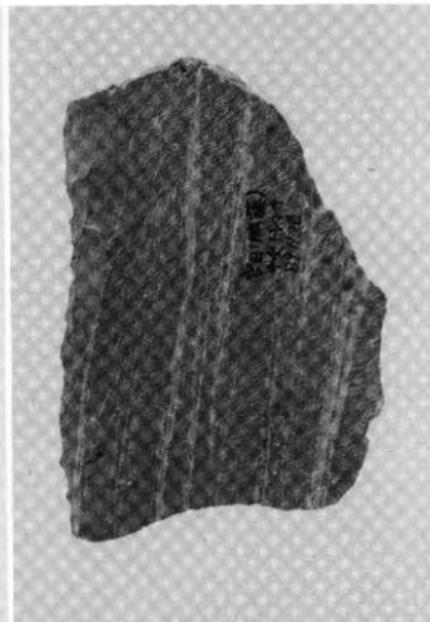
a. 宮田遺跡 西側トレンチ（北側から）



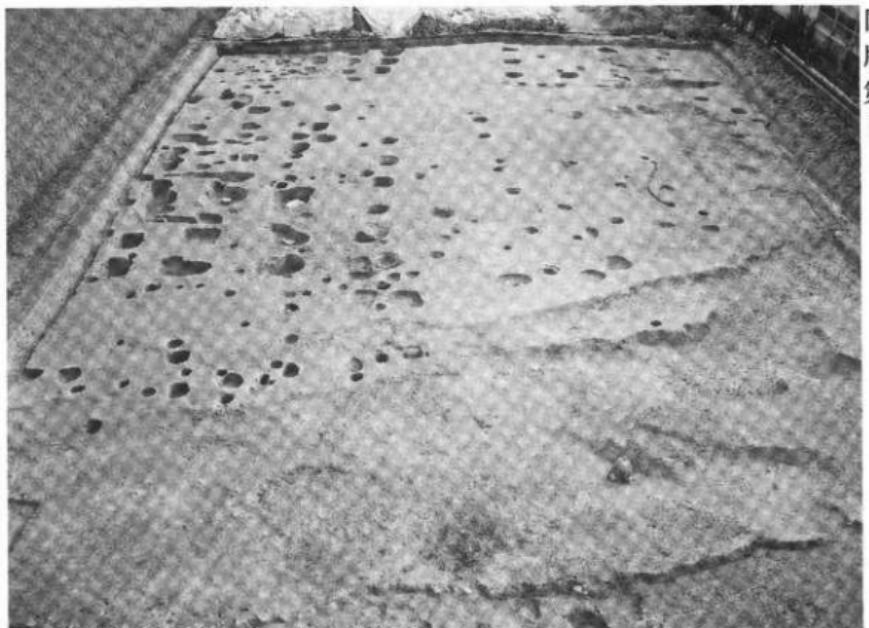
b. 宮田遺跡 中央トレンチ（南側から）



c. 宮田遺跡 中央トレンチ



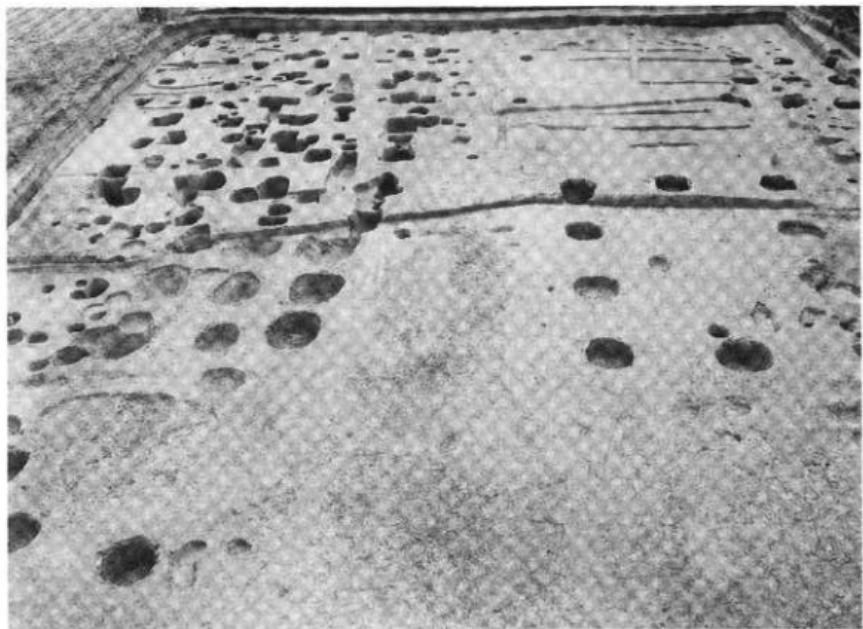
（実大）



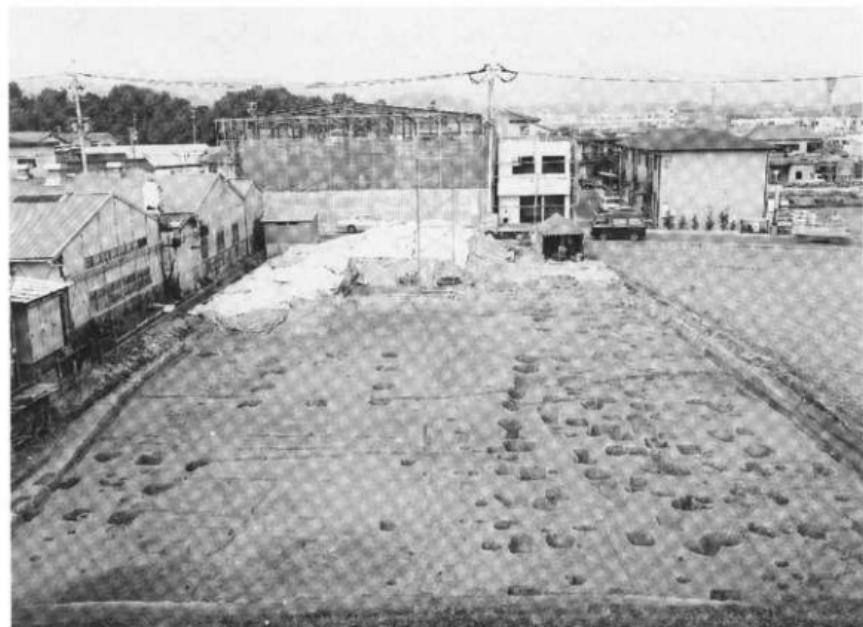
a. 郡家今城遺跡(89-2) 北側全景(北側から)



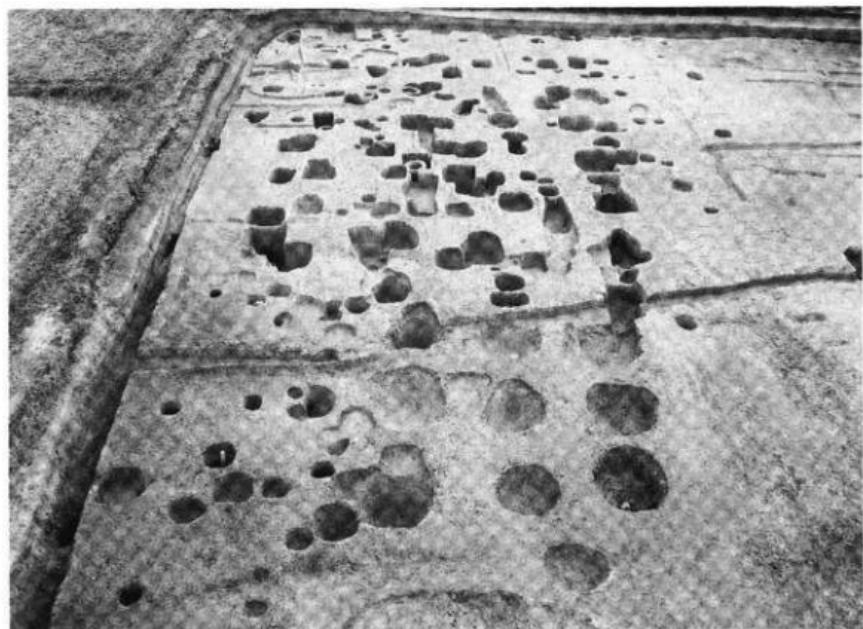
b. 郡家今城遺跡(89-2) 北側全景(南側から)



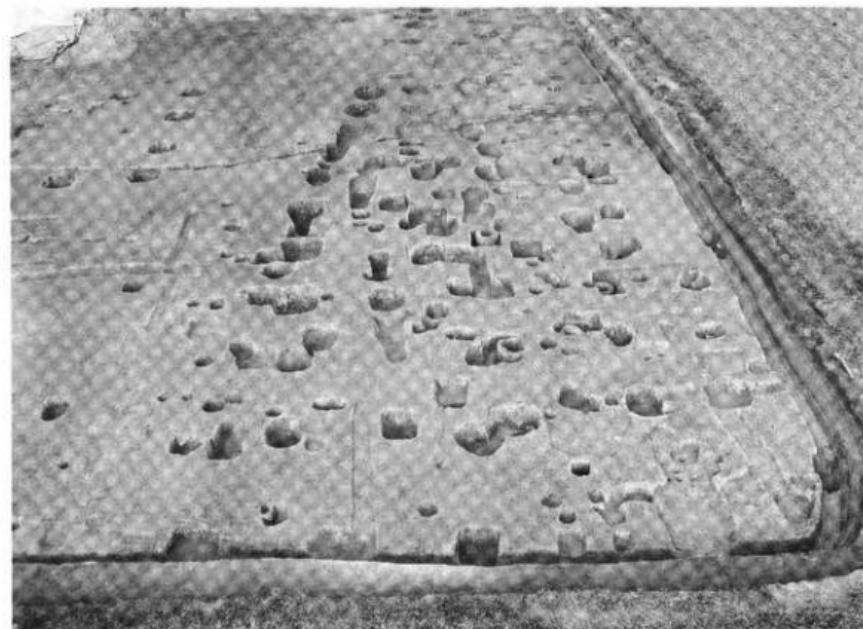
a. 郡家今城遺跡(89-2) 南側全景(北側から)



b. 郡家今城遺跡(89-2) 南側全景(南側から)



a. 郡家今城遺跡(89-2) 堀立柱建物群(北側から)



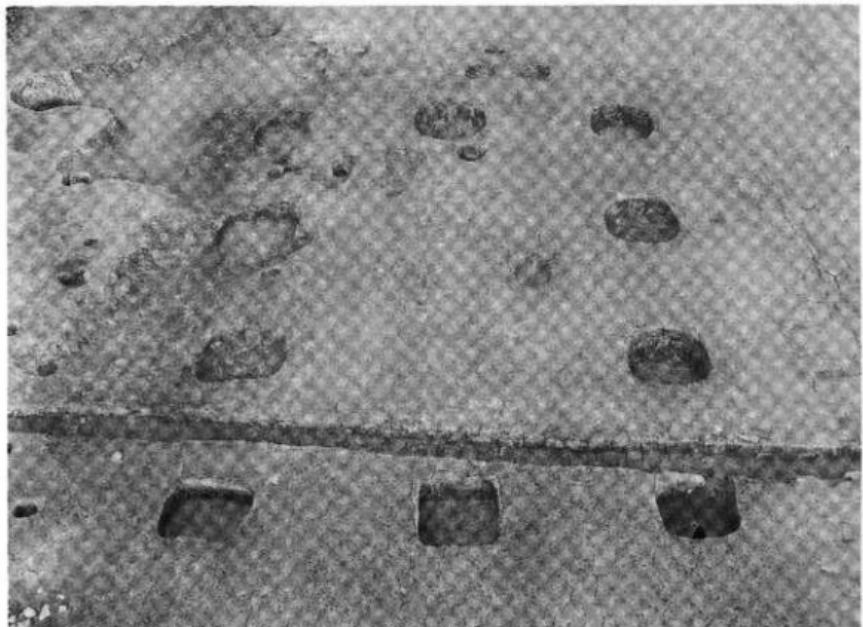
b. 郡家今城遺跡(89-2) 堀立柱建物群(南側から)



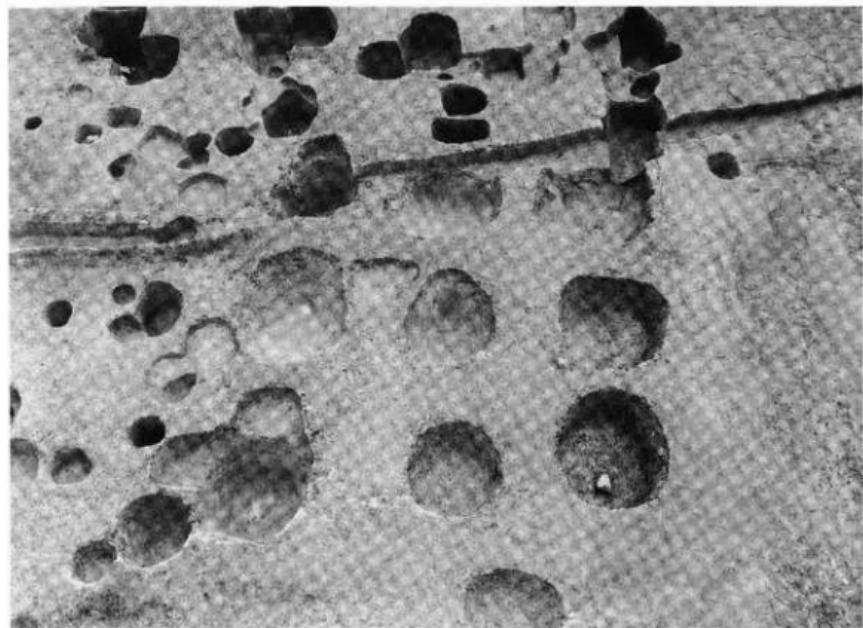
a. 郡家今城遺跡(89-2) 掘立柱建物1・6・7(南側から)



b. 郡家今城遺跡(89-2) 掘立柱建物1・6・7(北側から)



a. 郡家今城遺跡(89-2) 掘立柱建物2(南側から)



b. 郡家今城遺跡(89-2) 掘立柱建物3a・3b(北側から)